

2021/11/13

日本英語学会第 39 回大会ワークショップ
第 3 室「認知文法の基礎研究」

責任者：佐藤らな（東京大学大学院／日本学術振興会）

司会者：平沢慎也（慶應義塾大学）

企画趣旨

認知文法はこれまで、既存の主流派理論のオルタナティブとして位置づけられてきた側面がある。これは認知言語学が生成文法では説明できない（と見なされた）現象を扱うことから成立したという経緯に鑑みれば当然のことではある。しかし認知文法は現在、旗揚げから 40 年近くが経過し、独自の問題領域を開拓しつつある。このことには、固有の問いを深く掘り下げることができるというメリットがある一方、他の理論との対話が困難になることも懸念される。

本企画は、生成文法との争いから一定の距離を置いた現在の認知文法を見直し、その一歩先の議論を目指す。各発表では、認知文法の哲学的な基礎づけ、道具立てや理論的前提の再検討を行う。また、各発表が英語研究に対して持つ示唆についても具体的な現象を取り上げて論じる。最後には、現在の認知文法が他の理論からの批判に耐えうるものであるかを、様々な理論的枠組みに依拠するオーディエンスの方々と議論したい。

発表者・発表タイトル

1. 佐藤らな（東京大学大学院／日本学術振興会）

「Don't be that guy から考える世界の見え方」

2. 氏家啓吾（東京大学大学院）・萩澤大輝（神戸市外国語大学大学院）

「「コト」としての記号：認知文法から見た形態素」

3. 萩澤大輝（神戸市外国語大学大学院）

「使用基盤モデルの哲学的検討」

4. 田中太一（東京大学大学院）

「脳か人か：言うことはどのように決まるのか」

5. 平沢慎也（慶應義塾大学）

「まとめに代えて：英語学から見た「認知文法の基礎研究」

質問・コメントの送信先

<https://forms.gle/4pukoCHijUi3Jubo9>

- ・ 質疑は基本的に Google フォーム（上記 URL）にご記入いただく形で行います。
- ・ 内容に関係のないこと（音声がかええないなど）はチャットにお書きください。
- ・ 返答は時間が許す限り口頭でも行いますが、基本的には後日何らかの形で公開することになると思われます。
- ・ 公開ではなく個別で質問への返答が欲しい、匿名での質問公開を希望するなど返答方式に特別な希望がある場合は、Google フォームの備考欄にお書きください。

Don't be that guy から考える世界の見え方

東京大学大学院/日本学術振興会 佐藤らな
ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

4

1. 本発表の主眼

- 具体的な言語現象を通して、人による世界の認識（カテゴリー化）とそれを可能にする知識や仕組みについて考える。
- 具体的な表現を記述することは、目的ではなく、カテゴリー化の内実を考察するための手段である。（そのため関係する内容に絞って記述する）

5

“Don't be that guy”を通して

- 「この世界の記述に用いられているにもかかわらず実際には存在しない対象」に焦点を当てる。
- 認知文法におけるvirtual instance について検討する。
- 人間の知識、世界の見え方（カテゴリー化）について新たな知見を述べる。

6

2. “Don't be that guy!”とは

- 近年“Don't be that guy!” という言い方が口語的に何らかの行為を禁止する表現として用いられていることが観察される（Sato 2020）

7

(1) (文脈)

BarneyとQuinnは恋人同士である。Barneyは関係が深まるにつれてQuinnがストリッパーをしていることが辛くなってしまっていた。そんなとき、2人が道を歩いていると、Quinnの客である男性に出くわした。その客と別れたあとの会話である。



8

(1)

Barney:
Quinn, I love the fact that you're a stripper, but I hate the fact that you're a stripper.

Quinn:
Barney, I like my job. And I do not need to be rescued. So, don't be that guy.

(How I Met Your Mother, S7E22)

9

例（１）

- このthat guy は、彼らが直前に出くわした客を指しているわけでも、彼らの共通の知り合いである具体的な誰かを指示しているわけではない。



10

10

（２）

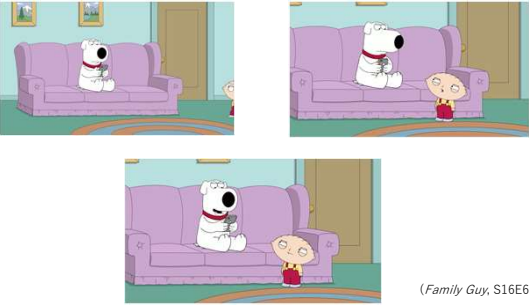
A: Hey Stewie, what do you think about this tweet?

B: Oh, don't be that guy.

(Family Guy, S16E6)

11

11



(Family Guy, S16E6)

12

12

（２）

- やりとりの冒頭部分であり、前後に第三者が現われているわけでもない。
- この例では、自分が書いたSNSの内容をどう？どう？と見せつけてくるような行為をやめるよう、Don't be that guy を用いて伝えている。

13

13

（３）

（状況） You want to stop your child from pouring oil into a cup.

a. Stop! Stop! Don't do that!

b. Stop! Stop! Don't be that guy!

(Sato 2020)

14

14

（３）

- 子供が、例えばまだ幼くて油とリンゴジュースの区別がつかず、誤ってコップに油を注ごうとしている場合は b は不自然な言い方になる。
- b は、子供がボトルの中身が油だということを知っていることを認識していて、さらに以前にも似たようないたずらをしたことがある場合に自然になる。

15

15

Don' t be that guy !

- That guy になることを禁止することで、（文脈からわかる）特定の行為を禁止している。
- That guy は、Don' t be that guyという表現でやめさせようとしている行為を、いかにもやりそうな人物を指している。
- (4) (5) のようにwho以下でどういう行為なのかを説明している場合もある。

16

16

(4)

But **don't be that guy** **who** decides to transport 240 fish in four large hard-sided suitcases – suitcases filled with nothing but water and fish.

(<https://www.boston.com/travel/travel/2014/07/15/10-strangest-things-ever-found-by-airport-security>)

17

17

(5)

The date? Uh, yeah, it went great. I don't know about a second date, though. **I don't wanna be that guy who just hangs out with his girlfriend all the time and doesn't see his friends.** Man, **I wanna be that guy** so bad.

(*Adventure Time*, Season 9-3)

18

18

that guyとは誰のことなのか

- That guy は、Don' t be that guyという表現でやめさせようとしている行為を、いかにもやりそうな人物を指している。

→名前があるような具体的な人物のことではない。

「実際にあの時それをしたことをしたあの人」は念頭にない。

19

19

(6)

He just always talked about women. He just went right to that. You could not get into a 30-second conversation where he wouldn't take it to something, "That girl's beautiful." We were taping *The Apprentice*. **He was that guy.**

(Allen Salkin and Aaron Short, *The Method to the Madness*)

20

20

(6)

- ここで言及されている人物が前アメリカ大統領のドナルド・トランプであることは明白。
- しかし、He was that guyは「He was he.」や「Trump was Trump.」などと同じ意味にはならない。
- ここでのthat guyは「女性の話ばかりしている嫌な人」を指している。

21

21

(7)

"Don't be that guy" wear a mask ad for New York state - May 5, 2020



(https://youtu.be/w6_inLBzjKkM 参照日2021.7.29)

22

22

(7)

- 一人の男性が指示されているように思われるが、彼が男性であることも、ひげを生やしていることも眼鏡をかけていることも関係がない。
- この例が「面白い」のは、that guyは通常特定の人物を指しているわけではないという知識を逆手にとっているからであると思われる。
- この例の場合でも「画面上のひげの男性」ではなく「公共の場でマスクをしないような人」がthat guyの直接的な指示対象であると考えべきである。

23

23

that guyとは誰のことなのか

- That guy は、Don't be that guyという表現でやめさせようとしている行為を、いかにもやりそうな人物を指している。

→名前があるような具体的な人物のことではない。

「実際にあの時それをしたことをしたあの人」は念頭にない。

24

24

2. 指示されるために存在する指示対象

- that guy は、認知文法におけるvirtual instanceの一種であると考えられる (Sato 2020) 。
- 談話における指示対象は実際に存在するものに限らず、想像上のものや可能世界に存在するものでも構わない (Langacker 2008: 270)

25

25

タイプ・インスタンス

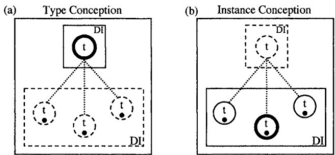
- The proposal, then, is that **an instance** (as opposed to a type) is **thought of as having a particular location in the domain of instantiation**, which serves to distinguish it from other instances. Starting from a type conception, instantiation is just a matter of conceiving the profiled entity as occupying such a location. (Langacker 2008: 268)

26

26

タイプ・インスタンス

(8) a. Jennifer is a **cat**-lover. b. Jennifer loves her **cat**.
(Langacker 2008: 266 [太字は引用者])



27

27

Virtual (fictive) instance

- 現実世界に実際に存在しているわけではないインスタンスを virtual (fictive) instanceと呼んでいる。
- Very roughly, we can say that a virtual instance is “conjured up” for a limited special purpose and has no status outside the mental space associated with that purpose.

(Langacker 2008: 271)

28

Virtual (fictive) instance

- 願望・否定・仮定

(9) Samantha wishes she had **a cat**. (Langacker 2008: 267)

(10) My brother doesn't have **a car**. (Langacker 2008: 36)

(11) If she had **a Porsche** she would drive **it** to church.

(Langacker 2008: 271)

29

Virtual (fictive) instance

- 一般化された（タイプ化された）存在もvirtual instanceとして表現される。
- タイプは（その性質から言って）常にvirtual である。

(12) Jenney is a **cat**-lover. (Langacker 1999: 97)

ここでのcatは（猫概念を表しているのであって）特定の猫が指示されているということもなければ、何匹の猫のことかなども問題にできない（Langacker 1999: 97）。

（※（12）はvirtual instanceの例ではない）

30

一般化する仕方

- Global generalization：名詞の表すカテゴリー全体に及ぶ一般化（Langacker 2008: 526f.）
- Local generalization：たまたま類似している限られた事物をその場で一般化（ibid.）
- 以下の（13）（14）は上記の仕方で一般化された概念をvirtual instanceによって表現している。

31

Global generalization

(13) **A kitten** likes to chase a piece of string.

(Langacker 2008: 36)

- （13）のような一般化はglobal generalization である
- global generalizationは名詞の表すカテゴリー全体に及ぶ一般化である。（Langacker 2008: 526f.）

32

Local generalization

(14) a. The witnesses all raised their right hands.

b. The witnesses all raised **their right hand**.

(Langacker 1999: 99)

- （14）aは、証人たち（the witnesses）全員の右手それぞれを直接描写しているのに対して、（14）bは、単数形で表示することによって右手を上げる行為を一般化している。（13）bは具体的なインスタンスをその場で抽象化するlocal generalization である。

33

that guy はvirtual instance

- Don't be that guy においてthat guyは特定の行為を（たしなめるように）禁止するために「ぱっと作り出された（conjured up）」存在である。
- that guy は、特定の人物を指さず、ある種一般化された存在者であり、virtual instanceであると考えられる。

34

34

どのようなvirtual instanceなのか

- 否定形を伴うが類例では否定形でないものもみられる。仮定や願望を述べる以外でも使われる。（cf. (6)）
- 一般的なカテゴリーとして定着しているようなものではないのでglobal generalizationではない。
- 文脈が整わなければ、どんな人物かまったくわからないため、その場で一般化しているとも言え、local generalizationをしていると言ってもいいと思われるが、(14) bのようにその場の具体的な複数のインスタンスから抽象化したわけではない。

35

35

virtual instanceとしてのthat guy

- 定義には当てはまるが、これまで指摘されてきた表現の仕方（例）には当てはまらない。
- ある種の一般化（タイプ化）が行われていることがわかるが、global ともlocalとも言いづらい。
- では、どういう一般化と考えればよいのか。

36

36

3. あるある的知識：
会ったことはないけれど絶対にいると思えるそいつ

- 「あるある」「あるあるネタ」
- 「多くの人々が日常生活で体験したことがあると感じられるような事柄。多数の人に共感を得られる事柄」
『明鏡国語辞典 第3版』
- 「日常生活における事象・見聞などで、多くの人の共感を得ることのできる話題。また、その話題で笑いをとる演芸のこと」
『デジタル大辞泉』

37

37

「あるある」「あるあるネタ」の例

- 小学校で一年中半袖短パンで過ごしている男の子。
- 言語学が専門だと伝えると「言語学専門ってことは何か国語も話せるんですか？」と聞かれる。

38

38

「あるある的知識」

- 「あるある」を成り立たせるような知識領域を「あるある的知識」と呼ぶ。
- あるある的知識には、興味深い特徴として2点挙げられる。

39

39

あるある的知識の特徴①

- 言われれば（なんとなくでも）わかるのだけれど、言われなければ、埋没しているような知識領域である（カテゴリーとして意識されづらい）。
- 言語化されればわかる、共感できるほど、なじみのあるカテゴリーであるのに、「猫」のように名前が付けられていない（いなかった）領域。
- 実際に猫に触れたことがない人でも、日本語話者なら猫の意味がわかるように、「学校に一人はいるこういうやつ」が特定の誰かを想起することがなくとも「いてもおかしくない」と思えることによって共感でき、理解することができる。

40

40

あるある的知識の特徴②

- 「あるある」の内容は、ある程度印象的であること（何かしらの形でインパクトがあること）が必要である。
- 「机に手が貫通しない」「山田さんが名古屋に引っ越す」はあるあるにはなりづらい。
- 「あるある」は印象的な内容であるにもかかわらず、明確に言語化されてこなかったからこそ「おもしろい」と感じる。

41

41

that guyは一種のあるある（ネタ）

- Don't be that guy というタイトルのYouTube動画では、男女3人の会話を映しながら、「会話中にこういうこと言うやつ、または、こういうことするやついるよね」という「あるある」を紹介している。
- 次のようにそれぞれのthat guy に名前を付けている。

(15) The interrupter: Always what you're going to say before you say it. Also, always wrong.

(<https://youtu.be/Kb22Dcrizp0>)

42

42

that guyは一種のあるある（ネタ）

- who(that)節で説明的に示される例は、「あるある」の内容を明示的に導入している表現だと言える。
(5) I don't wanna be that guy who just hangs out with his girlfriend all the time and doesn't see his friends.
- ありふれた内容であっても、印象的ではない（好ましくない行動ではない）内容がwho以下にくる場合は、Don't be that guyの例として解釈するにはとても不自然となる。
(16) # Don't be that guy who moves to Nagoya.

43

43

that guyは一種のあるある（ネタ）

- (4) はありふれた内容ではないが、奇抜でおもしろく印象的な内容であるため、「あるある」かのように提示することで笑いを誘っている

(4) But don't be that guy who decides to transport 240 fish in four large hard-sided suitcases – suitcases filled with nothing but water and fish.

44

44

that guyは一種のあるある（ネタ）

- (2) は、ほとんど文脈がないが、「自分が書いたSNSの内容をどう？どう？と見せびらかすような行為」が好ましくないことが「あるある」であると両者（および視聴者）が了解しているからこそ成り立っている。
(2) A: Hey Stewie, what do you think about this tweet?
B: Oh, don't be that guy.
- 以上から、Don't be that guy のthat guyは「好ましくない行為あるある」に当てはまる行為をする人と考えることができる。

45

45

4. 現実として了解するものの中身：
見えているつもりの世界

- あるある的知識は、「あってもおかしくない」ものとしていつでも生成でき、あるいは気づかない間に一般化を済ませていた隠された領域である。that guy のような表現は「あるある的な知識」を顕在化させるものである。
- あるある的知識は、現実世界において経験したことから導かれる、ある程度印象的である「ありふれた内容」もしくはあってもおかしくない内容であるが、まだ一般的なカテゴリーとして確立していないものである。

46

that guy の存在の仕方

- that guyはあるある的知識における存在者である。
- その場で「あるある的な内容」をタイプ化することが行われている。
- Don't be that guy.という行為を禁止する言い方は、「あるあるでネタにされるようなタイプの人物の一例になるな」ということを伝えている。
- 単に該当行為を禁止するだけでなく相手を「戒める」ことができる。

47

- あるある的知識はもちろん、百科事典的知識の一部である。百科事典的知識の中には予測によって成り立っている部分が多く含まれている。知識や典型を形作る仕方（カテゴリー化）には必ずある種の調整が含まれる（cf. Langacker 2016）。
- あるある的な存在者が容認されるのは、「そういうやついるよね（いてもいいよね）」というもっともらしい推測として了承されたときである。直接経験していないことでも「ある」ことをわかっていることは無数にある（例：足立区に住民がいる）

48

- 私たちの世界の認識にはたくさんの虚構が含まれている。むしろある程度の虚構を含まなければ、まともな生活を送ることはできないともいえる。
- Langacker（1999: 101）は、[現実というのは全てfictive（虚構・仮想的）なのかという問いに] yesと答え、心的世界の全体があるレベルではfictiveなのだと言うとしても、様々なあり方、様々な程度がある。そのため結局素朴には現実だと認めているもの、fictiveだとはっきり認めているもの、必ずしもfictiveだとみなされないものなど、これらすべてを分類し、その程度応じて整理する課題は残ると述べている。

49

- 本発表で焦点を当てたDon't be that guyによって気づかされるのは、私たちの現実世界の認識には予測や虚構に頼っている部分が多くあるということ、また、まだ定着した言葉にはなっていないけれど、いつでもタイプ（一般化できるカテゴリー）として確立できる存在（内容）を、知識として共有しているということである。
- In our daily lives we encounter many people, many birds, many houses, many rocks, many napkins, etc., and further believe that these are only some of the countless instances that exist. (Langacker 2009: 150)

50

参考文献

- Langacker, Ronald. W. (1999) Virtual Reality. *Studies in the Linguistic Sciences* Volume 29, Number 2.
- Langacker, Ronald. W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. (2015) Construal. Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics*, 120-143. Berlin and Boston: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald. W. (2016) Baseline and Elaboration. *Cognitive Linguistics* 27.405-439.
- Sato, Rana (2020) Who is that guy?: A cognitive linguistic perspective on “Don't be that guy” 2020 International conference on linguistics, 16. 10.2020 Online (Kyueng Hee University, Korea).
- Taylor, John R (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford Textbooks in Linguistics. Oxford: Oxford University Press.
- 本研究は JSPS 科研費 21J13661 の助成を受けたものである。

51

「コト」としての記号：認知文法における形態素

氏家 啓吾

東京大学 [院]

keigo5525@gmail.com

萩澤 大輝

神戸市外国語大学 [院]

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

1. はじめに

本発表では認知文法の立場から、形態素とは何かという問題を論じる。といっても、特定の語について「この語はいくつの形態素からなるか」といった個別の問いに明確な答えを与えることを目標とするわけではない。むしろ、そもそも記号の一部が意味を持つとはどういうことかという基礎的な問題に答えるための一つの視点を与えるものである。

ラネカー (Ronald W. Langacker) は近年、言語を活動として見ることの重要性を強調している。その一環として記号を「モノ化」する見方(「ブロックの比喻」)を否定し、一貫してダイナミックな「コト」として記号を捉えることが主張されている。本発表ではさらに、形態素を各言語使用者がたえず行っている「リンクを発見するゲーム」の産物として捉えることを提案する。

いくつか例を見よう。まず英語では、predecessor (先行者) という語が、語源的には無関係の動詞 precede (先立つ) との連想に影響されてか predecessor と表記されている実例が見られる。

- (1) The environment that influences the composer's choice includes fellow composers, **predecessors** and contemporaries, who chose the sonata form among other forms for their compositions.

(William Croft, *Explaining language change: An evolutionary approach*, 2nd edition, Ch.2)

日本語でも、「えこひいき」という語が「えごひいき」と表記される例などが見られる。また、「電子レンジ」という語が「レンシレンジ」と表記されている例が Web 上には多数見つかる(三條 2015)。

- (2) すいちゃんはある日の配信でサポートが万全ではないこと、ホロメンとのコラボが制限されていたことを明かしたことで、AZKi さんがえごひいきされているとの憶測も広がります。

(ブログ)

- (3) レンシレンジはあった方がいいかなって思う。[...] 作り置き温めるには便利かも (Twitter)

これは単なる表記のミスではなく、言語知識の違いの現れであろうと思われる。このような例(本発表では「野良バリエント」と呼ぶ)は、典型例では滞りなく実行されているがために見えなくなっているリンク発見のプロセスが目に見える形で現れたものである。

本発表では次の3つのことを論じる。

- (i) 記号をモノ化するブロックの比喻を否定し「コト」として捉える
- (ii) 形態素は話者が手さぐりで行う「リンク発見ゲーム」の産物である
- (iii) 各話者による語の分析の揺れを考察することの意義

2. 形態素に関する認知文法の考え方

2.1 ブロックの比喻

形態素に関する一つの古典的見解は次のようなものである（Langacker 2019: 348）。

(4) モノ的な形態素観：

言語表現は、意味または文法的機能を持つ要素に余すところなく分解できる。各要素は常に同じ意味・同じ形式を持ち、重なりあったり相互に影響しあったりはしない。そのため全体の意味は部分から予測可能である。

ここには、言語表現の構成を「モノを組み立てる」こととして捉える見方が反映されている。この捉え方をラネカーは「ブロックの比喻」（building-block metaphor）と呼んでいる。

しかし、この比喻を全面的に受け入れた理論化には限界がある。例えば Wednesday という語を考えると、day を形態素として取り出した場合、残りの部分は意味が不明瞭なため形態素と認定できないという問題が生じる。かといって全体を分析しないままにすると、day が含まれているという他の語との共通点を捉えられなくなる。また、glitter と literati の混成語である glitterati（華やかなセレブ）などは、各要素の重なりを積極的に利用したものであり、形式と意味の厳密な一対一対応を認めることは困難である¹。この問題は記号のモノ化により引き起こされたものであり、以下に紹介する「活動パターン表示」を用いて考えることで解消されるとラネカーは主張する。

2.2 Langacker (2019) の見解

認知文法の提唱する使用基盤モデルと呼ばれる見方では、言語の使用を可能にする知識は、言語ユニット（音韻的・意味的および記号的ユニット）の集合であると考えられている。ユニットとは、心的事象の定着したものである。

- (5) 心理的な事象は生起するたびにある種の痕跡を残し、その痕跡によって当の事象は再び生起することが容易となる。繰り返し生起することにより、きわめて複雑な事象であっても習熟の十分なルーチンとなり、容易に引き出され確実に実行されるものになる。複合的な構造がいわば「バック詰め」された構成体（アセンブリ）として操作されるようになり、部分やその配置に意識を向ける必要がなくなったものを、ユニットの資格を持つと言おう。

（Langacker 2000: 3–4; 拙訳、強調原文）

言語ユニットとは、実際の言語使用（使用事象）からカテゴリー化などの認知能力を用いて抽出された共通点が、心内に定着したものである。言語使用（産出・理解）にあたっては、対象となる表現や概念をカテゴリー化する際、習得された言語ユニットが活性化される。記号的ユニットとは、音韻と意味の対であるようなユニットである。心内に定着したものであれば、どんな音韻と意味の対も記号的ユニットとみなされる（語、接辞、慣用句、構文スキーマなど）。定着は程度性を持つため、ユニット性も程度問題である。

近年、ラネカーは言語のダイナミックな側面を（以前よりさらに）強調している。言語構造と

¹ このような各種混成語の使用基盤モデルによる分析として、Kemmer (2003) を参照。

は、本質的に時間の中で展開する「活動」である。ここでの活動とは、脳内での認知的処理活動と、行為主体としての人間が行う活動（話し手・聞き手間のやりとりなど）との両方を意味する（田中発表も参照）。そのような考えのもとで形態素の問題が再考されている Morphology in Cognitive Grammar という論文では、言語構造の活動としての側面を捉える新たな図示方法を提案した上で、形態素分析の際に生じる問題は記号をモノ化することに起因するものであり、活動であることに注意すればそうした問題は生じないと主張している。

言語表現のダイナミックな性質を捉えるものとしてラネカーが新たに提案する表記法（「活動パターン表示」）は、次のように円や楕円を用いてユニットを表す。例えば定着のプロセスは次の上段の図で表され、ユニット同士の重なり合う関係、包含関係は下段の図のように表される。

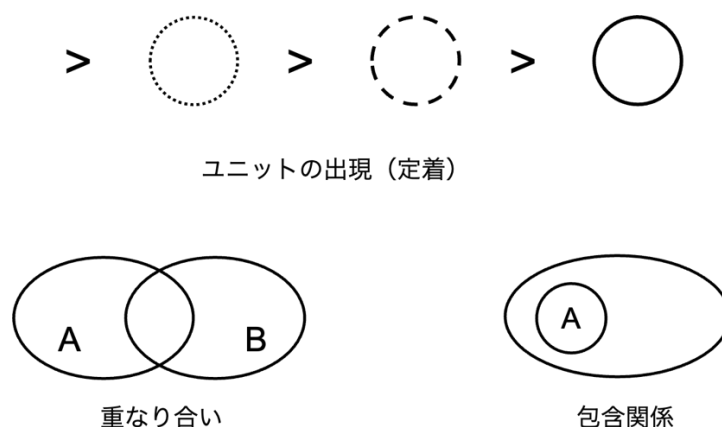


図 1 活動パターン表示 (Langacker 2019: 349)

例えば V+er という構文と complainer という語はいずれも慣習的な記号的ユニットであるが、両者の間にはスキーマと事例の関係がある。認知文法でよく用いられてきたネットワークによる表示法（図 2）ではスキーマと事例が独立した存在であるかのような印象を与えるが、スキーマとは共通性のことである以上、処理活動の観点から言えば、スキーマは必然的にその事例に内在していることになる。このことが活動パターン表示では図 3 のように表示され、内在性が視覚的に分かりやすくなっている²。

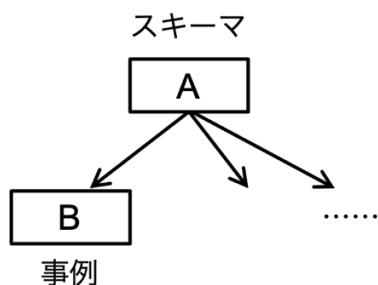


図 2 ネットワーク表示でのスキーマと事例

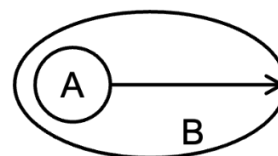


図 3 活動パターン表示でのスキーマと事例

² 各図のスキーマから事例へと伸びる矢印は、スキーマ・事例関係を表すものであり、それ以外の含意は一切ないことに注意されたい。時間的な前後関係があるわけでも、スキーマの方が基礎的というわけでもない。

2.3 分析可能性

以上のように記号の活動としてのあり方を反映した活動パターン表示を参考にしながら、記号の一部が意味を持つとはどういうことかを考察しよう。認知文法の考えでは、合成 (composition) とは、複数のユニット ($A \cdot B$) を活性化させることを通して、両者がある仕方で共振させることで見えてくる第3の構造 (C) に到達することである。そしてこの時、各要素は常に調整を受けたもの ($A' \cdot B'$) として実現する (図4)。これは記号の合成に関する「パーツを組み合わせる」という比喻に依拠しない見方である。

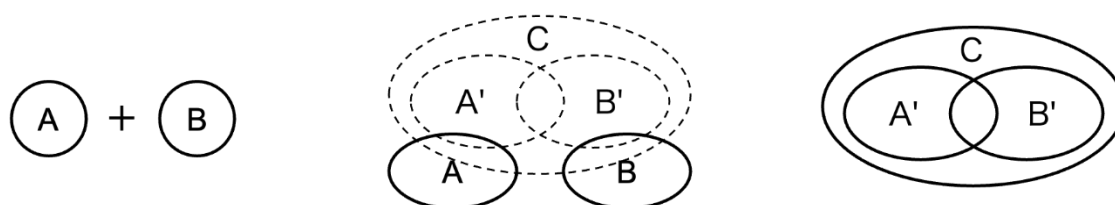


図4 合成には調整が含まれる (Langacker 2019: 350)

分析可能性とは、ある部分が全体に貢献していると感じられる程度のことである。例えば、complainer と computer という語を比べると、各部分 (動詞と接辞-er) の分析可能性は多くの人にとって computer の方が低い (computer という語を使用するときに「compute するもの」と意識する人は少ない)。さらに、propeller となるともっと低いと思われる。新規に組み立てられた表現は分析可能性が最大である。全体が定着してユニットとなった場合でも、部分が意識されているうちは分析可能性がまだ高く、くり返し使用され全体に直接アクセスするようになるにつれて低くなっていく。

このように、分析可能性は連続的であり、大多数の複合的表現単位はスケールの中の1とゼロの中間に位置すると考えられる (図5)。また、記号の一部だけが分析可能である場合もある。ブロック的記号観ではこうした点が見過ごされてしまう (図6)。

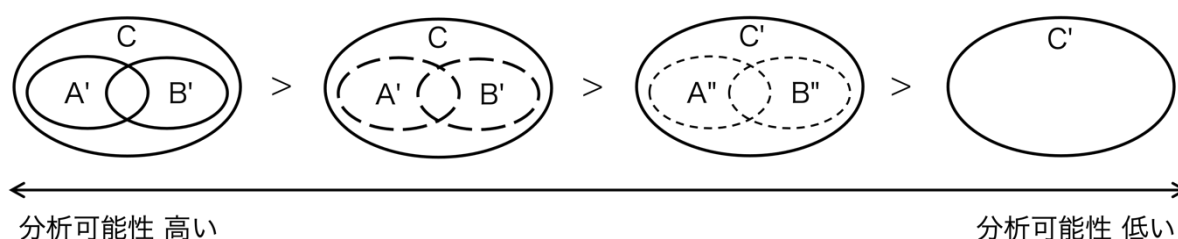


図5 分析可能性の程度はさまざま (Langacker 2019: 352)

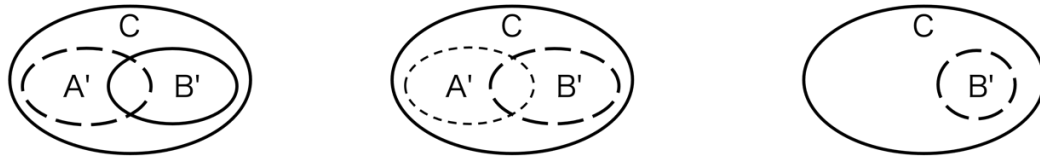


図 6 記号の一部だけが分析可能であってもよい (Langacker 2019: 352)

以上の議論は、記号の部分が意味をもつということに関して「ブロックの組み立て」とは異なる見方を可能にするものである。inept (能力がない) という語の使用において否定接頭辞 in- の知識は活性化されるが、ept は現代英語話者の知識において単独で活性化される要素ではない。このような完全に分解可能ではない例でも、活動パターン表示では上の図 6 のように一部のみの役割を担っていると考えることができる。Wednesday の day も同様である。日本語の「おつむ」「おしめ」「おじや」などの語も同様に分析できるだろう (宮島 1973 参照)。

また、flicker, fly, flutter, flip などの fl から始まる一群の語は、どれも「素早い小さな動き」に漠然と関連づけられるような意味を持っている。このような要素 (音象徴素; phonaestheme) も、**記号的な共通点**であるという点では他の形態素と呼ばれるものと変わらない。もちろん、fl-という形式が常に首尾一貫して素早い小さな動きを表すわけではない。例えば、flannel の指示対象は毛織物であって、素早い小さな動きとは関係がない。だが、完全に一貫していないのはどの形式にも言えることである。例えば plant (植物) は ant を含んでいるがアリとは特に関係がない (Langacker 2019: 353)。だからといって ant がアリという意味を持たないと結論づけることはできない。このように、記号の一部が意味を持つことによって、(局所的にであれ) **共通点が見いだされることが重要なのであって、完全に一貫しているかどうかは重要ではない**。

次の例も、言語表現は定まった意味を持つ形式を組み合わせたものであると考えるモノ的記号観にとっては問題となる。

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| (6) a. <u>コロナ禍</u> のなか異例の選挙戦 | (読売新聞オンライン 2020/07/04) |
| b. <u>コロナ禍</u> での五輪開催 | (朝日新聞デジタル 2021/08/21) |
| c. <u>コロナ禍</u> 下の宿泊業の模索 | (朝日新聞デジタル 2020/06/16) |

(6a) に関しては、「コロナ禍」の「禍」が災禍を表す部品だと考えても理解できる。しかし、(6b) では、「禍」という形式に「禍」と「下」の両方の意味が見いだされているため、こちらは部品の組み合わせという見方が維持できない (なお (6c) は形式と意味の一対一対応を保っている)³。

以上のように、形態素分析の際のいくつかの問題点は「ブロックの組み立て」としての記号観に由来するものであり、この見方は維持できない。言語構造が活動 (「コト」) であると認識することでそれらの問題点は解消される。

3. リンク発見ゲーム

³ 「炎天下」は要素から考えれば「炎天のもと」という意味だが、「炎天下のもと」という表現がしばしば観察され、しかも余剰とは感じられない。これは「コロナ禍」とは逆に、「下」という形式に対応する意味が見いだされなくなっている現象である。

3.1. リンク発見ゲームとは

ラネカーは記号的共通点が一定程度強化されたものを形態素と呼んでいる。ただ、共通点は見いだされるものである以上、その背後には「つながりを見いだす」というプロセスが不可欠である。また、客観的には共通点が希薄であったとしても、話者によってはつながりを見いだすこともある。ラネカー自身、全体に部分が「入っている」と「入っていると感じる」ことは異なると論じている (Langacker 1987: 457)。例えば plant (植物) と ant (アリ) とのつながりをほとんどの人は意識しないであろうが、植物とアリと一緒に観察されることは経験上よくあることから、結び付けている人がいてもおかしくない。Taylor (2015) も、meet (会う) と meat (肉) の綴りを混同しがちな人は「食べる方は eat を含む meat だ」という仕方で meat と eat を結びつけることがあるだろうと述べている。この場合、その人はまさに meat の中に記号としての eat を見ていることになる。そこで、以上のラネカーの議論を受け入れた上で、さらに一步進んで、形態素をはじめとする記号的共通点を各言語使用者が行う「リンクを発見するゲーム」(萩澤 2020) の産物として捉え、その性質を考察することを提案したい。このリンク発見ゲームも記号の動的側面の一つである。

類推による語形成について考えることで、分析者にとって「構成要素」と見えるものの背後に言語使用者によるリンク発見活動が存在することがわかる。typo (タイピングのミス) という定着した語をもとにして、thinko (思考のミス) や scanno (スキャンのミス) といった語が使用されることがある (萩澤 2019 参照)。しかし、typo 以外の事例は散発的には観察されるものの多くの英語母語話者が日常的に触れるものではないため、-o が特定の意味内容と結びついているとは認識されにくい。-o (ミス) という記号が存在すると言いたくなるとすれば、分析者の視点に立っていくつかの事例を見比べた結果、共通点をモノ化したためだ。一方、alcoholic に由来する -holic (～中毒) などは、それを含む語が多く存在するため、多数の話者が共通性を見いだしていると思われる。そのため -holic という記号を一つのモノであるかのように語ることが自然に感じられやすい (類例は Callies 2016 参照)。このように、複数の記号の間のリンクを発見すること、「構成要素」を認識することは表裏一体の関係にある。Langacker (2009: 235) の「パラディグマティックな関係とシンタグマティックな関係は重なり合っているものであり、区別できないことも多い」という主張は、このことを一般的な形で述べたものと理解できる。

3.2. リンク発見ゲームの性格

リンク発見ゲームの一般的な原則として以下のものが想定できる。

i. 効率性の程度

リンクには効率性の程度がある。多くの表現に含まれる比較的一貫した意味を持つ要素に関しては、リンクを発見することのリターンが大きく、発見できなければ実践的に不便である。たとえば「イタリア人」「ロシア人」…などの表現の中に潜在している「人(じん)」リンクは発見しやすく、発見すると一気に多数の語が整理されるという意味で効率が良い。リンクを見出さずにすべて別物として処理するのは、不可能ではないとしても不便である。幅広い環境に生起する語や生産性が高い接辞は非常に効率性の高いリンクであるため、多くの話者の認識が

一致しやすい。

逆に、効率性がそれほど高くないリンクは、見いだしても見いださなくても実践上それほどの違いは生じない。そのため、個人差が生じる余地が出てくる。「電子レンジ」に潜在する「電子」リンクは、効率性が高くないために認識に個人差があるのだと推測できる。

ii. 平準化の力

共同体の各話者のリンク認識を平準化するよう働く要因がいくつか存在する。まず、コミュニケーション上の要請がある。言語によるコミュニケーションが成立するためには話し手と聞き手の言語知識が十分な重なりを持つ必要があるので、伝達の欲求は言語知識を互いにすり合わせる要因となる。また、文字表記による平準化も無視できない。読むこと・書くことは言語知識への反省を促し、各話者に同じリンクを見つけさせる力となる。さらに、上述の意味で効率性が高いリンクは大多数の人が見いだすので、結果的に平準化に寄与することになる。

iii. リンクの減衰

ある表現の中にリンクを見いだしたとしても、全体への馴染みがまずにつれて部分は見えにくくなっていく。これはラネカーの言う分析可能性の低下である（注3「炎天下のもと」に関する議論を参照）。

ラネカーのいう「ブロックの比喻」は、誤っているにもかかわらず言語使用者の素朴な意識や分析者の見方に広く浸透している。それは、この比喻の成り立つような状態が、リンク発見結果の理想的な形の一つであるためであると思われる。効率性が高いリンクが多く、平準化が完全になされた状態では記号をモノとして捉える語り方が自然なものに見えやすくなる。現実はその理想的な状態とは程遠いため、ブロックの比喻は問題を招く。

3.3. 野良バリエント

冒頭で触れた例に戻ろう。「えこひいき」を「エゴひいき」と認識する例は、リンク発見のプロセスを必要以上に（多数派よりも）押し進めた結果とみなせる。一方、「電子レンジ」を「レンシレンジ」と認識する話者は、多数派が発見しているリンクを発見していないと言えるが、これにも相応の理由があると推察される。(i)「電子」が種の区別に役立っていないこと（「電子」でないレンジがあるわけではない）、(ii) 表記に接する機会がそれほど多くないこと、(iii) 電子レンジで加熱することがしばしば「レンチン」と略されること、(iv) 押韻の観点から見た「レンシレンジ」の語呂の良さ（「なんだかんだ」「てんやわんや」などに類する例としてあってもおかしくないと感じさせる）、などが挙げられる。こうして見るとリンク発見ゲームの一般的プロセスがここにも働いていることがわかる。「レンシレンジ」は最適解にこそ到達していないものの、一つの局所解に落ち着いた結果なのである。

「電子レンジ」に対する「レンシレンジ」、「えこひいき」に対する「エゴひいき」などの例を（「さみしい」と「さびしい」のように広く認識されているバリエントと対比して）野良バリエントと呼ぶことにしよう。三條（2015）はウェブ上から集めた次のような例を挙げている。

(7) 朝っぱな (朝っぱら)	一色単 (一緒くた)	物議をかます (醸す)
とっさに (発作的に)	考え深い (感慨深い)	歓喜あまって (感極まって)
責任転換 (責任転嫁)	毎度同じみ (お馴染み)	話を着色する (脚色する)

理想的な語の例だけを見ると、「ブロックの比喻」が成り立つように思える。しかし、野良バリエーションを観察することによって、言語使用者による語の認識には、常に手探りのリンク発見のプロセスがあることが思い出される。「レンシレンジ」のような周辺的な例は、典型例では滞りなく実行されているがために見えなくなっている背後のプロセスが、目に見える形で現れているのである。

参考文献

- Callies, Marcus (2016) Of soundscapes, talkathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language typology and universals*, 459–516.
- 萩澤大輝 (2019) 「*Typo* に基づく語形成の考察」『東京大学言語学論集』41: 31–50.
- 萩澤大輝 (2020) 「語形成のそもそもを考える」『東京大学言語学論集』42: 41–58.
- Kemmer, Suzanne (2003) Schemas and lexical blends. In: Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Motivation in language: Studies in honor of Günter Radden*. 69–97.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*. 1–63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2009) Constructions and constructional meaning. In: Evans and Pourcel (eds.) *New directions in cognitive linguistics*. 225–267. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2019) Morphology in cognitive grammar. In: Jenny Audring and Francesca Masini (eds.) *The Oxford handbook of morphological theory*. 346–364. New York: Oxford University Press.
- 宮島達夫 (1973) 「無意味形態素」国立国語研究所 (編) 『ことばの研究 第4集』15–30.
- 三條雅人 (2015) 『ネットで見かけた信じられない日本語：うろ覚え・勘違い・言い間違い・誤植』東京：社会評論社.
- Taylor, John R. (2015) Word-formation in cognitive grammar. In: Peter O. Müller, Ingeborg Ohnheiser, Susan Olsen and Franz Rainer (eds.) *Word-formation: An international handbook of the languages of Europe*. 145–158. De Gruyter Mouton.

使用基盤モデルの哲学的検討

萩澤大輝 神戸市外大 [院]

hagisawa_daiki@yahoo.co.jp

1. はじめに

ロナルド・W・ラネカーの提唱する認知文法では**使用基盤モデル**という考え方が採用されている。これは Langacker (1988) で明示的に導入された認知文法の根幹を成す理念であり、近年ではこれをより徹底し、談話を含めた言語知識の全領域を統一的に捉える試みが進められている (Langacker 2016)。この言語観では、言語知識はおおむね次のようなものとされる。使用事象からカテゴリー化などの認知能力を介して記号的単位が抽出され、それらが柔軟な心的ネットワークを構成し、そこでは具体性の高い単位とその一般化とが離散的ではなく一体となって存在している。ここでの使用事象とは典型的には具体的な発話の経験が、ひいては (具体的な発話を伴わなくとも) 言語形式と結びつくような概念によって対象をカテゴリー化する経験一般が広く該当するものである¹。

フンボルトやウィトゲンシュタインとは対照的に、カントは (Johnson 1987 のような例外を除くと) 言語学では言及されることの少ない哲学者だが (Katunar and Eterović 2017: 311)、その主著『純粋理性批判』(CPR) では**判断力** (カテゴリー化能力に相当²) と**事例**の関係が一般的な形で論じられている。使用基盤モデルはまさにその 2 つを軸として構築されているため、その議論は同モデルに対し何らかの示唆を持つと考えられる。

そこで本発表は「認知文法の基礎研究」の実践例として、カントによる議を追いつながりながら使用基盤モデルとの共通点・相違点を明らかにすることを目指す。それにより、使用基盤モデルだけでなく言語学一般に関しても、従来それほど考察されてこなかった原理的側面に検討を与えることが可能となる。

本発表で注目するカントのテキストに関して説明・注記をしておく。『純粋理性批判』の中心的な位置を占める部門が「超越論的分析論」である。その部門は二部構成になっており、後半にあたる「原則的分析論」冒頭に付された「序論」が本発表で特に注目する箇所である。以下、各セクションの冒頭にゴシック体で示した文章は厳密な引用ではなく、発表者が理解した限りでの内容を再構成したものである³。本発表においてカントはあくまでも使用基盤モデルを検討するための手がかりであるため、解釈学に深入りはせず、発表者による要約に基づいて議論を進めることとしたい。

¹ 使用事象を広く捉えるこの見解はラネカー自身が明言しているものではないが、言語表現の意味をきわめて豊かなものと見なす百科事典的意味観と、言語知識がもたらす使用事象から得られるという使用基盤モデルの想定を両立させるならば、こう考えるのが妥当と言える (田中太一、個人談話)。

² のちにカントは『判断力批判』(V 179) において、普遍によって個別者を包摂する「規定的判断力」と、個別者からそれを包摂するような普遍を見出す「反省的判断力」を区別している。前者はカテゴリー化、後者はスキーマ化の能力に相当する。本発表が扱う箇所での判断力は一貫して前者である。なお Croft and Cruse (2004: 54) でもアリストテレス、カント、フッサールらによる判断力という概念がカテゴリー化能力と重なるものとして言及されている。

³ 原文のドイツ語解釈にあたっては東京大学の佐藤らな氏から多くを教わった。

2. 無限後退・判断力・生得性

知性 (Verstand, understanding) が規則を与える能力であるのに対し、ある対象に規則が適用されるかどうかを見分ける能力は**判断力** (Urteilkraft, judgment) である。規則適用の可否を一般的に示すならば、再び規則に訴えることになってしまう。そのため、判断力とは教育されることのない、ただ訓練されるべき特殊な生得的才能ということになる。知性に関しては他者が備える規則を伝授してもらうことで教育が可能であっても、それを正しく用いる判断力はひとえに個人の資質なのである。そして判断力が欠けていれば規則適用にあたって誤りは避けられない。(CPR A 133/B 172)

この部分は「規則の無限後退」を食い止める試みであると理解できる (Esfeld 2001: 71)。ごく素朴に考えると、一般的な規則と具体的な事例さえ与えられれば、そこから帰結が得られるのは自明のように思われる (例えば「p ならば q」という規則があり、p という事例があれば、その規則と事例から q が導けるように思える)。しかし、一般規則と具体事例に加えて「その両者が与えられた時に当の規則が適用でき、結論が導ける」ということ自体まで規則によって明示せよと要求されるとどうなるだろうか。それに応じて規則を追加してしまうと、それらに加えてさらなる規則の提示を同様に求められる可能性が常に存在するため、無限後退に陥ってしまう。Tiisala (2016: 8) の指摘する通り、これはいわゆるキャロルのパラドクスと同型の問題である。

カントはこの問題の解決策として、ある事例に対して規則を適用すべきかどうかを規則を参照しない形で見分ける能力を導入する。これが判断力である。判断力は規則の無限後退を食い止めるものである以上、この能力自体を規則の教示によって教え込むことはできない。そして教示が不可能なのであれば、何かしら他の経路で判断力を確保する必要がある。そこでカントは判断力の生得性を想定するわけである。そしてそれは(規則の教示という形での)教育ではなく、ただ「訓練」されるものだとされる。

以上の議論は要するに、ある主体が適切な判断をすることができる場合、それは生得的な資質と経験による訓練で可能になる、という主張としてまとめられる。哲学的な考察から導かれた主張とはいえ、これは認知文法の立場からも同意できるものである⁴。カテゴリー化能力に関わる先天的な障害や生後の経験不足があれば、ある規則が適用されるかどうかを適切に判断することは困難となることが見込まれる。

そうした不適切なカテゴリー化には、例えばインフルエンザを単なる風邪と思い込んで治療を試みるような比較的軽微なケースから、68 と 57 の和を 125 でなく 5 であると思ってしまうような極限的なケース (Kripke 1982) まだが(少なくとも原理的には)ありうる。次節ではこうした「不適切なカテゴリー化」が、判断のすり合わせや規則自体の変化によって解消されるということを見る。

⁴ 当然ながら、カントのいう規則と認知文法での規則(すなわちスキーマ)には違いもある。前者は事例と独立に存在し、超越的な規範性を持つ。一方、認知文法において規則と事例は別個の存在ではなく、規則は事例に**内在**する(immanent)という形で存在していると想定される。

3. 誤り・一致・変化

例えば医者・裁判官・政治家は、精緻な規則を多数記憶していて教師になれるほどであったとしても、それを適用しようとするときに簡単に誤りを犯すことがある。それは (a) 生まれつき判断力が欠けていて、一般的なことを抽象的には理解できても、具体事例がそれに該当するか判断できないから、あるいは (b) 判断力はあるにせよ事例や実地経験による訓練が不十分だからである。(CPR A 133/B 173)

まず (b) を言語に関連づけて理解すると、これは非母語の学習者による言語使用などが該当すると思われる。抽象的な規則をいくら記憶していても、具体事例に多く接した経験がなければ、規則の適用に失敗することはごく普通に生じるだろう (三単現の-s をつけ忘れてしまうなど)。もちろんここに原理的な問題は存在せず、カテゴリー化の能力に異常がない限り、経験を積むにつれて自然に解消されるものである (ただし、5 節で論じるように母語話者の言語使用でも混乱・混同は生じうる)。

(a) では、判断力が不足していると、一般規則を把握していてもその適用段階で誤りを犯す可能性があると思われている。ここで例にあがる医者・裁判官・政治家は、その誤りを指摘し、規則を改めて示し、考える時間を十分に与えれば判断を訂正するような、現実的な人物が想定されていると思われる。Tiisala (2016: 10–26) によると、そうした判断の一致を可能にする仕組みとして Fodor (1975) は人間の脳に生物学的な基盤があると考えている。また、それと排他的ではない別の仕組みとして、ウィトゲンシュタインは訓練や「生活形式」の一致の重要性を指摘している (PI § 206, 241 など)。この 2 つの解答はいずれも使用基盤モデルと整合的なものである。

以上の議論をさらに一歩進め、規則から外れた判断をする主体が数多く存在する場合に規則がどうなるかを考えよう。計算や治療における規則は人間の知識・判断と独立であり、きわめて厳密性が高い。ある「医療行為」が誤解に基づくものであれば (e.g. 祟りと考えて祈禱する)、いかに多くの医師がその正しさを確信していたとしても、それに合わせて疾病の発生機序および正しい治療法の方が変化することなど起こりえない。言語にもこうした超個人的な厳密性 (規範) は見られるが、言語の性質はそれに尽きるわけではない。一方で裁判官による判断は我々の言語実践に比較的近い。特に「判例法主義」(case law system) に基づく法運用においては、過去の法的事例の集積がそのまま法として機能する。社会情勢 (ないし生活形式) の変化に応じた判例が増えるに従って、判例から成る法それ自体が変化するのである⁶。そこでは、まず事例が蓄積することで規則が生じ、さらに逸脱的な事例が増加するにつれてその規則自体が変化するというプロセスが生じている。使用基盤モデルが捉える言語の姿とは、まさにこのようなものである。

⁵ 「欠けている」(mangeln, deficient) というのが「完全な欠如」であれば、訓練する対象がそもそも存在しないため、4 節で見る「歩行器」すらも無意味になるはずである (Chaouli 2017: 69)。整合的なテキスト解釈を得るため、この表現は「欠如」ではなく「不足」と解することにする。

⁶ 使用基盤モデルと判例主義の親和性は浅尾仁彦氏の指摘による。法学と認知言語学を接続する試みについては Zeifert (2020) も参照のこと。

4. 事例の功罪

判断力の鋭さを磨くというのは事例の持つ唯一の大きな効用である。しかし知性の正確さは事例によって損われることが多い。それは (a) 事例が規則の条件を十全に満たすことは少ないため、そして (b) 規則そのものを経験独立的に見極めようとする知性の努力を弱め、規則を**原則** (Grundsätze, principles) ではなく単なる**決まったやり方** (Formeln, formulas) のように用いる習慣をつけてしまうためである。つまり事例とは、判断力を助けるいわば「歩行器」 (Gängelwagen, baby walker) であって、判断力の不足した者はこれが欠かせないことになる。(CPR A 134/B 174)

(a) は事例と規則の間には乖離が存在するという一般的主張として理解できる。使用基盤モデルでは事例が使用事象、規則がスキーマと読み替えられる。このスキーマとは経験したことのある事例から抽出された共通性であって、永久不変の存在ではない。新たに経験した事例の特徴が既存のスキーマでは捉えきれず、「拡張」が必要となる場合があるという指摘として読めば妥当であり、前節末でも論じた通りだが、それは少なくとも言語使用に関しては特に問題ではない。言語 (の知識) は変化していくものであり、このことは使用基盤モデルの中核的な主張である。

(b) は人間の発達段階をアナロジーとして用いたものである。判断力は自然に発達するものなので介入は控えるべきだという考え方が読み取れる (Louden 2009: 80)。乳児が歩行器に頼りすぎると筋力が発達せず自立歩行が困難になるのと同様に、事例への依存は規則そのものを見極める知性の力を衰弱させるというわけである。これは、常に一般原理を意識しつつ判断・行動すべきというカントの実践的な倫理観を考慮すれば理解できる懸念である。しかし、やはりこれも使用基盤モデル的に言語を捉える限りにおいてはまったく問題とならない。一般の言語使用者がスキーマそれ自体をあえて事例から分離して意識し、それを利用した言語使用をする必要性はないためである。

ここで、規則が「決まったやり方」として扱われると述べられていることに着目したい。これと対比されている「原則」とは、ある状況が与えられた時に、その都度、意識的な演算を経た判断を行うための基準・参照先となるものと考えられる。一方で「決まったやり方」とは、ある状況と具体的な判断の結果が一挙に結びつけられた全体を指すものと理解できる。例えば、かけ算の規則および計算処理の全体が、九九を唱えることで置き換えられた状況が該当する。これは (カントの批判を考えるとやや皮肉であるが) 使用基盤モデルの発想と明らかに親和性を持つものである。言語使用において主要な役割を果たすのは抽象的な規則よりも「決まったやり方」であり、「このような場面でこのような意味を伝達したいならば、このような発話をする」といった手続き的知識である (平沢 2019)。だからこそ、何らかの発言をする際、言葉は半ば自動的に出てくるわけである (田中発表の「彼の分まで生きて」事例も参照のこと)。それに関連して、自らの発言を決まり切った言葉づかいに任せることの倫理性を問うことも可能であり (古田 2018: 3 章)、その点については 6 節で改めて考察する。

5. 人間と賭け

上の箇所でヒトの発達が引き合いに出されている点は注目に値する。そもそも規則に即した実践にあたって事例が必要となるのは、我々が人間的な心理・認知のあり方をしているからである (Louden 2009: 78)。使用基盤モデルが言語のありようを捉えることに成功しているとしても、あくまでも現在までに知られている主体による言語使用を考える限りで妥当な「仮説」だという点は銘記すべきだろう (cf. 平沢 2019: 6 章)。カントは「異世界人」の存在を積極的に支持しているが (CPR A 825/B 853)、その予想が的中し、しかも人間的な認知や身体に基づかない形で高度なコミュニケーションを行う主体が発見された場合、言語という概念が改定され、それを捉えるモデルにも修正が加えられることになる。人間の (言語) 知識を柔軟なものとする認知言語学では、言語や意味などの根本的な概念ですらアプリアリな前提ではなく、状況に応じて変化しようと見なされるのである。

前節ではカントによる事例批判を二つ検討し、言語使用に関する限りで退けたが、この「人間的な心のあり方」という点に関連して第三の問題を投げかけたい。それは、事例それ自体が言語使用に困難を及ぼしかねないという問題である。使用事象には情報が (おびただしいほど) 豊かに詰まっている。だからこそ、いくら経験を積み重ねても行為の指針として活用できない恐れがあるのである。どれだけ発話・発話者・発話状況を観察しても、どこで探索を打ち切り、どの情報に注目すべきか、決定的な判断を下すことは人間にはできない。そして、そのことに拘泥しては言語使用に踏み出せないのである。

これはすなわち**フレーム問題** (Dennett 1987) が言語使用にも当てはまるということである。例えば、発話者同士の対人関係や位置関係が適切な表現選択に影響することはあるが (cf. ポライトネス、ダイクシス)、発話時の緯度・経度や話者の瞬きの回数などに注意を向けていても、それが言語使用の指針になるとは考えにくい。しかしながら、使用事象のどの側面に注目すべきで、どの側面は捨象して良いかという点は明示的に教わることはなく、そもそも教えようとしても不可能だろう⁷。通常、人間はそうした選択的注意が周囲の人間とおおまかに一致する状態で (ないし一致させる訓練への適性を持って) 生まれてくるため、この問題の存在は意識されにくい。しかし原理的には、どれだけ使用事象を経験してもそこから発話に踏み出してよいという保証は得られないのである。人間の認知リソースは有限である以上、常に不安要素は残る。それを乗り越えるには思い切った**賭け**が必要となる⁸。そこでエラーを過剰に恐れず発話に踏み出すことのできる話者こそが「生得的才能」を持っていると言えるだろう (発話に伴うこの「賭け」が前景化しにくいのは、参与者間で調整をしながら会話を進めることが認められている場合が多いため、賭けのリスクが無視できるほどに低いということも一因と思われる)。

⁷ Dąbrowska (2020) は言語使用者の間で事例の持つ規則性への感度に個人差があることを実証的に示している。Dąbrowska 的な言い方をするならば、使用事象の細部に対して「過敏」だと円滑な使用に支障をきたすということになる。

⁸ この点は岡田美智男の提唱する「投機的行為」 (entrusting behavior) という概念に示唆を受けている (岡田 2017 など)。人間は、歩行するとどうなるかをあらかじめ考え抜いてから歩くわけではない。思い切って環境と関わり合い、環境に導かれながら歩くのである。

言語のこうした側面は机上の空論ではなく、現実の使用の中でもその一端が観察される。学習者は人為的に導かれた規則を明示的に与えられるため、割り切って発話できる面があるが、母語話者はそれとは異なり、情報量の多い無数の事例から試行錯誤しつつ手探りで共通性を抽出していく。それゆえ、「母語話者であるがゆえの混乱・混同」という逆説的にも思える現象が存在するのである（詳細は平沢発表を参照）。使用基盤モデルは自然な言語使用のありようを捉えようとするモデルであるが、その「自然さ」とはアナウンサーのような終始スムーズな発話には限られない。人間的な限界と賭けに伴う逡巡・混乱・言い直しなどの非流暢性も射程に含むものである。

6. 決定論と言語学

古田（2018）のように「決まったやり方」的な言語使用の倫理性を問うならば、「当為は可能を含意する」（Ought implies can）というスローガンで知られる他行為可能性原理（Principle of Alternative Possibilities）を考慮する必要があるだろう。別の言い方も可能だったということを、すなわち**自由意志**の存在を示さねばならないのである。決定論が正しければ、「～と言いたくなる」などの自動的な事象だけでなく、「複数の表現を反省・吟味し、じっくりくる最適な表現を選ぶ」といった能動性のある行為であっても一意に決定された不可避の事態であり、その是非が問いえなくなるためである。自由の立証がきわめて困難な課題であることはカント自身が第三アンチノミーとして定式化している（CPRA 444/B 472）。別の箇所では自由意志を認める態度を表明しているものの（A 534/B 562 など）、証明に成功しているとは思われない。

自由意志を認めるかという論点は倫理学のみにとどまらず、言語学を含め非常に多くの領域に波及する（例えば責任、恣意性、動機づけなど言語的に重要な概念も著しく変容してしまう）。果たして言語は自由に使えるのだろうか。それとも自然法則と過去の状況・事象から現在の発話は完全に因果的に導かれるのだろうか。そのどこか中間に帰着するのだろうか。あるいはこうした二分法的な発想がそもそも誤っているのだろうか。この問題は自由や決定といった概念の内実を明晰化せずには（あるいは「概念工学」的な改定を加えずには）解決の与えようがないだろう。いずれにせよ、言語使用の中核である脳も自然法則を免れるとは考えにくい。したがって（認知）言語学が自然科学たらんとするならば、**因果的決定論**との兼ね合いを検討していく必要があるだろう⁹。

『純粋理性批判』は序文で「たとえ大いに賞賛され、人気のある妄想が消滅するとしても、哲学の義務は、誤解から生じた幻想を廃棄すること」であると述べている（AXIII, 石川訳）。これはカント自身の議論にも跳ね返ってくる。決定論がいかに直感に反するとしても、説得的な反論がない限り、科学的知見の帰結として受け入れざるを得ないのではないだろうか。そして、人間的な観点からすると、決定論と両立する言語学を構想する道は十分にありえるのである¹⁰。

⁹ 神学的（および論理的）決定論は理論言語学が直接的に検討すべき論点ではないと思われる。

¹⁰ 本節で提起した問題は田中発表でも部分的に取り上げられる。

7. おわりに

本発表はカント『純粋理性批判』が提示する事例をめぐる議論に沿って使用基盤モデルの諸側面を検討し、以下のことを論じた。(i) 適切な言語使用には生得的な「判断力」(カテゴリー化能力)と後天的な訓練が必要である、(ii) 言語における「規則」(スキーマ)は柔軟に変化する、(iii) カントによる事例批判は使用基盤モデルを脅かすものではない、(iv) 人間が事例をもとに言語を使用するためには「賭け」が必要となる。そして最後に決定論と言語学の関係をどのように考えるべきかという論点を提示した。

参考文献

- Chaouli, Michel (2017) *Thinking with Kant's Critique of judgment*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Croft, William and Alan Cruse (2004) *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dąbrowska, Ewa (2020) Language as a phenomenon of the third kind. *Cognitive linguistics* 31: 213–229.
- Dennett, Daniel (1987) Cognitive wheels: The frame problem in artificial intelligence. In: Pylyshyn, Zenon (ed.) *The robot's dilemma: The frame problem in AI*, 41–64. Norwood, NJ: Ablex.
- Esfeld, Michael (2001) *Holism in philosophy of mind and philosophy of physics*. Dordrecht: Kluwer.
- Fodor, Jerry (1975) *The language of thought*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- 古田徹也 (2018) 『言葉の魂の哲学』 東京：講談社。
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか—多義論から多使用論へ』 東京：くろしお出版。
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press. 菅野盾樹・中村雅之 (訳) 『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換』 東京：紀伊國屋書店。1991 年。
- Katunar, Daniela and Igor Eterović (2017) Kant's notion of schema and its basis in linguistic analysis. *Synthesis Philosophica* 32, 311–334.
- Kripke, Saul A. (1982) *Wittgenstein on rules and private language: An elementary exposition*. Oxford: Basil Blackwell. 黒崎宏 (訳) 『ウィットゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心—』 東京：産業図書。
- Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, 127–161. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In: Grzegorz Drożdż (ed.) *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23–53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

- Louden, Robert B. (2009) Making the law visible: The role of examples in Kant's ethics. In: Jens Timmermann (ed.) *Kant's Groundwork of the metaphysics of morals: A critical guide*, 63–81. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡田美智男 (2017) 『〈弱いロボット〉の思考—わたし・身体・コミュニケーション』 東京：講談社.
- Tiisala, Tuomo (2016) Power and freedom in the space of reasons. PhD Dissertation. University of Chicago.
- Wittgenstein, Ludwig (1953/2009) *Philosophical investigations*. Revised 4th edition by P. M. S. Hacker and Joachim Schulte. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Zeifert, Mateusz (2020) Rethinking Hart: From open texture to prototype theory—Analytic philosophy meets cognitive linguistics. *International Journal for the Semiotics of Law*. <https://doi.org/10.1007/s11196-020-09722-9>
- カント, イマヌエル (2004) 宇都宮芳明 (監訳) 『純粋理性批判 上』 東京：以文社.
- Kant, Immanuel (2007) *Critique of pure reason*. Edited and translated by Marcus Weigelt. New York: Penguin.
- カント (2010) 中山元 (訳) 『純粋理性批判 3』 東京：光文社.
- カント, イマヌエル (2012) 熊野純彦 (訳) 『純粋理性批判』 東京：作品社.
- カント, イマヌエル (2014) 石川文康 (訳) 『純粋理性批判 上』 東京：筑摩書房.
- カント, イマヌエル (2015) 熊野純彦 (訳) 『判断力批判』 東京：作品社.

脳か人か：言うことはどのように決まるのか

田中太一 東京大学 [院]

t.tanaka6002@gmail.com

1. はじめに

どのような理論であれ、その基礎を支える哲学なしには成立し得ない。現状では（ただでさえ不足している）「言語学の哲学」(philosophy of linguistics) は、その多くが生成文法を対象としたものであり (Devitt 2003, Santana 2016, Nefdt 2019)、認知文法の言語観や、それに基づく言語研究の正当性を主題とした研究は、Langacker 自身によるものが多少は存在するとはいえ、いまだ予備的段階に留まっている。たとえば、言語学の研究対象を規定する「言語の存在論」についてすら十分な議論が行われているとは言い難い状況である。

この問題に取り組んだ先駆的な研究として Itkonen (2016) が挙げられる。ここには多くの単純な誤解が含まれている（たとえば、Langacker の提示する図を、捉え方を含まない写真のようなものとして理解している）とはいえ、Popper (1972) による存在論上の区別を援用して成された以下の批判は検討に値するものである。

(1) Itkonen (2016) による整理

world-1 生物学的・物理的レベル：observation の対象

world-2 心的レベル：introspection の対象

world-3 社会規範的レベル：intuition の対象

Itkonen (2016) は、Langacker は world-2 を対象にしていると主張しているにもかかわらず、実際に研究しているのは world-3 であると批判したうえで、言語（学の対象）は規範であり、認知主義的な立場は成り立たないと主張している。しかしながら、言語は社会的規範のみによって十全に説明できる対象ではない。このことは、たとえば次の思考実験によって理解することができる。ある人 X の言語知識では、りんごのことを「みかん」と、みかんのことを「りんご」と呼ぶことになっているとする。X がテーブルの上りんごがあることを報告しようとして、「テーブルの上りんごがある」と自身の言語知識に反して、誤って (!) 言ってしまった場合に、言語（の意味）は規範に尽きるとする立場からはここには何の誤りも存在しないことになるが、これは著しく直観に反する¹。

Langacker (1987, 1997, 2010 など) による一連の議論を踏まえると、(少なくとも) 認知文法の立場からすれば、言語は world-1, 2, 3 のいずれか一つに属するという見方は成立しないように思われる。ごく簡単にまとめるならば、言語は、人間の生物学的・物理学的レベルでの身体を

¹ この問題は、X が自分自身である場合に、とりわけはっきりと理解できるだろう。

基盤とし、心的な過程を通じて、他者と効果的にコミュニケーションを行う活動として、すべての領域に渡るしかたで規定されることになるだろう。とはいえ、各領域の間には一種の緊張関係があるのもまた事実である。たとえば、Langacker(2000:6) は「突き詰めれば、言語に見られる構造や関係は認知過程に、すなわち神経活動に帰されるものである。」と述べている。言語が脳の神経活動という物理的対象なのだとすると、心的・社会規範的側面は単なる付随現象になってしまう。行為主体としての人は、脳の働きを直接にコントロールできない以上、脳のおまけにすぎないということを事実として受け入れるべきなのだろうか。

認知文法では、言語知識は activity (を抽象化したもの) だとされている(氏家・萩澤発表を参照)。そのため、言語使用がどのような過程として実現するのかを検討することによって(認知文法にとっての)言語の存在論に迫ることができる。以下では、古田(2018)が行った〈しっくりくる〉言葉を選び取る実践に関する議論を、認知文法の枠組みで読み替えることを通して、認知文法にとって言語とはどのような存在なのか、とりわけ言語の主体は脳なのか、それとも(脳にとどまらない、行為主体としての)人なのかという問題を検討する。

2. 対象それ自体のカテゴリー化

以下の文章では、言語使用の実態が(戯画的に)描き出されている。

「言語を「その場に応じたことを言うゲーム」だと思っている人がいる」

友人が死んだ。母からメールが来たとき、「彼の分まで生きて」などと言われた。全く意味がわからなかったし、失意の息子を励ます言葉としては意味が通らないように感じられた。

「の分まで生きて」という言葉がフィクションでよく登場することは知っていた。だが、それはその物語の中で、意味が通る状況で使われていると思っていた。現実で使われる場合でも、やはり意味が通らなければならないと思っていた。「こんにちは」のような、文字通りの意味が失われている言葉とは違うだろう。

母に意味を聞いたら、「よく言うから言ったのだ」と言う。つまり、意味なんかなかったのだ。母にとって、言葉とは、似た状況でよく言われる言葉を使うゲームに過ぎないのだろう。

似たことは当時付き合っていた女性との間でもあった。私は彼女のある発言をとって「偽善だ」と言った。そうしたら彼女が言い返したことは「でも、こう言う時はこう言うんだよ」と言う。つまり、意味などなく、「こう言う時こう言う」からそう言ったのだ。そのとき私たちは喧嘩をしていたから、これが彼女の通常の状態と違うと言う保証はない。だが、少なくともその瞬間、彼女にとって言語とは、意味を伝え合うゲームではなく、その場に応じた言葉を発するゲームだった。

思えば、世の中の半数近い人の言葉に対する態度はこんなものではないか、と言う気もする。多くの人は言葉の意味など考えない。その場の状況によく当てはまる言葉を発し、相手もやはりそれに対して典型的な返事をするだけである。言葉に意味はない。

大袈裟だろうか。(https://anond.hatelabo.jp/20181130112105 2021 年 11 月 4 日参照)

仮に発話状況が話し手の判断を介さずに定まるものだとするならば、ここでの発話は状況から自動的に導かれるものとなる²。この場合には、私（たち）はいわば脳のなすがままに発話を行っていると言えるだろう。たしかに、発話にはこのような側面がある。毎回の発話で、何をどのように述べるかを意識的に検討していたのでは、流暢に話すことは不可能であろう。一方で、発話には意識的反省が伴う場合もあることもまた確かである³。

「言葉に迷う」・「言いたいことがあるのに上手く言葉にできない」といった経験は、あまりにも日常的なものである。そのようなとき、私（たち）は思い浮かぶ言葉をともあれ（多くの場合仮想的に）使用してみることによって、自分が言いたいことが言えているかどうかを確かめることになる。本発表では、思い浮かんだ言葉とその（仮想的なものを含めた）使用を区別する。「発話」によって指されるのは後者である。

次の引用から分かるように、古田（2018）は、言葉を選択する際の手がかりとなる〈じっくりくる〉・〈じっくりこない〉という感覚は、類似する言語記号を比較することから生じると考えているようである。

(2) 我々は日々の生活のなかで、言葉同士を比較し、評価し、口に出すべき言葉（あるいは、書き出すべき言葉）を選び取る、という実践を行っている。(古田 2018: 112)

(3) 〈じっくりこない〉〈どうも違う〉といった迷いは、類似した言葉の間でしか生まれぬ。
我々は、迷い、ためらうことを可能にする言語を贈られているのである。(古田 2018: 210)

しかし、ある言葉が〈じっくりこない〉という感じは、言語記号の比較のみに由来するものではない⁴。たとえば、「イタチ」という語は知っているが「ハクビシン」という語は知らない人がハクビシンを目にした際に、〈じっくりこない〉気分を感じつつ「イタチ」と呼ぶことがありうる。この場合には、「ハクビシン」という語は日本語にすでに存在していることから、あくまで潜在的には類似した言葉との比較が行われているのだと主張することは可能かもしれない。では、イタチに似ているが（角が生えている、人間の言葉を話すなどの理由で）イタチではないことは明らかな未知の生物を目にしたとしたらどうだろうか。今度はその生物を呼び表す慣

² もちろん、発話状況にもまた話し手の判断が関わりうる。この点については、第3 節で論じる。

³ 正確には、反省は有無のような2 値ではなく様々な程度を持つということになるだろう。

⁴ 「類似」もまた（古田の意図からは外れるかもしれないが）広い意味で取る必要がある。ある本を指示する際に「この本」・「あの本」・「その本」のどれを選択するか迷うことや、選択の結果が〈じっくりこない〉と感ずることがありうる。この場合、「この」・「あの」・「その」は、「類似した言葉」ではないが、同種の機能を担う要素として対立しているという点で類似していると考えられる。

習化した言語記号は存在しないため、潜在的にすら類似した言葉との比較が行われるとは言い難いだろう。この場合でもやはり、〈じっくりこない〉という感覚を覚えつつイタチとして捉えることはありうるのである⁵⁶。

この例で〈じっくりこない〉感じが生じたのは、対象を「ハクビシン」や、当の生物と結び付けられることになる（かもしれない）言語記号によって呼び表せないからではなく、対象を無理にイタチとして捉えようとしたためである。イタチとして捉えるとはつまり、イタチとしてカテゴリー化することである。カテゴリー化は一般に、対象を既存の知識によって構造化すること、平たく言えば、あるものを何かの一種と見なすことである。

西村 (2018: 11) は、カテゴリー化について「普段あまり意識されてはいないけれども、実は日常生活の中で絶え間なく行っており、それなくしては生存することが不可能になると言ってもけっして誇張ではないほど、人間にとって、あるいは生物一般にとって、極めて重要な営みであると言える」と指摘している。カテゴリー化は慣習化した言語記号の存在とは独立に生じうるのである。たとえば、喫茶店で向かいの席に座っている友人が、常に同一の人物として立ち現れるのは、それぞれの瞬間におけるその人を、（時間を通じて存在し続ける）その人自身の事例として捉えているためである⁷。

私（たち）が対象を言語によって表す際には、対象が属するカテゴリーの把握と、そのカテゴリーを表す言語記号の選択が行われている。言語記号（の意味）は対象を適切にカテゴリー化できるものとして提示されるものであるため、後者もまたカテゴリー化の一種であると言える。〈じっくりくる〉・〈じっくりこない〉という直観は、この2つのカテゴリー化のいずれにおいても生じうる。このように考えると、古田 (2018) の挙げる例の中心が、「むつごい」・「いい」・「やさしい」など、主体の感覚と深く関わるものであることは非常に示唆的である。たとえば「むつごい」にかんする説明は次のようなものである。

- (4) 「油っぽい」、「濃い」、「くどい」、「しつこい」、「ごちゃごちゃしている」、「けばけばしい」といった言葉が、「むつごい」の意味として次々に並べられた。聞き手はこれらの言葉を見渡すことで、すべてが互いに関連しつつ、一個の有機的なまとまりを構成するように感じてくる。そして、まさにそう感じることに於いて、「むつごい」という言葉がもつ独特のニュアンスないしは表情と呼びうるものを掴んだのである。 (古田 2018: 97)

このような仕方での理解が重要なのは、対象に〈むつごい〉という性質が帰されることの大きな手がかりとして、主体が経験するその性質に対応する感覚が機能しているためだと考えられ

⁵ これは、使用基盤モデルにおける「拡張」の事例に当たる。

⁶ この状況であっても、たとえば「変わった生き物」などの表現が比較対象になりうるとも考えられる。ただし、目の前の生物に対するカテゴリー化は、いわゆる基本レベルカテゴリーによってなされるのが典型的であるために、〈じっくりくる〉言葉の候補としては、やはりふさわしいとは言えないだろう（この問題提起は佐藤ら氏による）。

⁷ 個体自体をある種のタイプとして捉える過程がどのようなものかは独立の検討を要する（佐藤発表を参照）。

る。主体に生じる感覚そのものの事例を他者に対して示すことは、多くの場合に困難である。そのため、すでに何らかの感覚と結びつく形で習得された複数の言語記号を見渡し、そこに共通する経験を突き止めるという仕方では意味が習得されることになる。古田 (2018) の考える「言葉の立体的理解」はこのような過程として実現するものと思われる。ここでは、「むつごい」という語を理解することの不可分な一部として〈むつごい〉という概念（この場合はとりわけ感覚）が習得されている。言い換えれば、対象のカテゴリー化と言語によるカテゴリー化（「それは何か」の把握と、「それは何と呼べるか」の把握）が同時に生じるのである。対象が公共的に観察可能である「イタチ」や「ハクビシン」の場合であれば、このような手順を踏むとは考えづらい。〈イタチ〉・〈ハクビシン〉という概念は、世界の中のイタチやハクビシンにかんする知識を深めることを通じて習得され、さらに、それぞれの言葉が対象（と結びついた概念）を適切にカテゴリー化できるものとして習得されるのであって、さまざまな置き換え可能な言語記号を並べて、それらのどれとも違うことを知るといような手続きを踏むことはない。というよりも、「これがイタチだ」などと言う際に「イタチ」と自然に置き換え可能である言語記号など（ほとんど）存在しないであろう。

また、古田 (2018) は「立体的理解」の成立要因として、置き換え（パラディグマティックな関係）に注目しているが、共起関係（シンタグマティックな関係）を見渡すこともまた、「立体的理解」の形成にとって重要であろう。言語記号の場合には、コロケーションにかんする知識が理解の重要な側面を成している。類似した関係はカテゴリー化の対象にも当てはまる。イタチにかんする経験は人によって異なる。（直接的であれ間接的であれ）豊富な経験を有する人は、イタチを生態の様々な細部などの複雑な知識に（たとえば、巣や食性に関する経験の共起を通じて）位置づけるかたちで理解し、〈イタチ〉概念をより豊かなものとしていくのである⁸。

3. カテゴリー化と言語知識

第1節で触れたように、Langacker(2000: 6) は「突き詰めれば、言語に見られる構造や関係は認知過程に、すなわち神経活動に帰されるものである。」と述べている。カテゴリー化は、対象それ自体の把握に由来する神経活動を、既存のカテゴリーに由来する神経活動のパターンに引きつけて構造化する過程として捉えられる。この過程では、あくまでも脳（神経ネットワーク）が主体となっており、人が出る幕はないようにも思われる。一方で〈じっくりくる言葉を選び取る〉のは、あくまでも言語を使用する主体としての人であり、脳ではないはずである。

では、言葉を選び取るという実践は幻想に過ぎないのだろうか。この問に対して究極的な答えを与えることは（おそらくは誰にも）できないが、ここでは2つの手がかりを示しておきたい。発話には様々な側面が含まれるということと、私（たち）は発話に対して責任を負えるという信念のもとで生活していることである⁹。

⁸ 野矢 (2011: 150-155) における、囲碁で使用される「厚い」・「薄い」という概念にかんする議論も参照されたい。

⁹ 「責任」とは物理世界に存在する実体ではなく、人間同士の関わりにおいて初めて生じうる対象だと考えられ

発話には対象の記述に関わる面だけでなく、主体に生じる感覚、話し手聞き手間のやり取り、先行・後続発話との関係といった様々な面が含まれている (Langacker 2016)。したがって、発話される言語記号は、理想的には、これら全ての面を適切にカテゴリー化できるものとなる。つまり、主体の置かれている発話状況もまた、第2 節で検討したイタチやハクビシンなどの（記述の）対象と同じ意味でカテゴリー化されているのである。

(5) と (6) は、聞き手が求められている行為は同じだが、話し手の聞き手に対する態度が異なっており、それぞれの言語表現がそれを適切にカテゴリー化している。カテゴリー化が神経活動によるものだとしても、話し手の振る舞いは（少なくとも日常的な意味では）話し手自身の意志によって（かなりの程度）決定されるものであるため、その意味で主体による選択が行われていると言えるのである。

(5) 出て行ってください。

(6) 出て行け。

同様のことは、一見するともっぱら記述的であるような発話にも当てはまる。少し（あるいはかなり）変わった猫についてコメントするという状況では、(7) と (8) のどちらも自然に用いることができる。この際、話し手はいずれの場合も対象を猫としてカテゴリー化し、聞き手もまたそのようにカテゴリー化することが想定されているとすると、(8) では、聞き手に〈生物〉という概念を介して猫をカテゴリー化させることによって、その非典型性に注意を向けさせていると考えられる。これは、カテゴリー名を個体に適用するシネクドキの事例である (山泉 2005)。聞き手に対し、ある概念を提示し、それによって対象をカテゴリー化させるという手続きは、話し手の聞き手に対する態度の一部であり、(猫を〈猫〉として捉えることは、あまりにも当たり前であるために) 意識されづらいものではあるが (7) にも見て取ることができる¹⁰。

(7) あの猫、変じゃない？

(8) あの生物、変じゃない？

4. 発話の責任を引き受ける主体としての人

言葉は世界に影響を与える。命令を考えてみれば即座に了解されるように、言葉は（ある意味で）因果的な働きを持つことがあるのである。これは最も典型的な陳述の場合であっても同様である。たとえば、差別的な発言 (e.g. 「〇〇人は××だ。」) は、それによって他者を害するからこそ差別的だと判断される。言葉が引き起こした事態に対して責任を引き受けるのは人

る。

¹⁰ ここでの記述は、言語使用が基本的に話し手・聞き手・対象の三項関係として成立するものであることを前提としている (cf. 本多 2016)。言語記号が持つ対象をカテゴリー化する働きは、話し手が意図した対象へと聞き手の注意を誘導する過程に由来するものだと考えられる。

であって脳ではない。このことは、人間社会での実践から明らかである。脳が（行為の主体として）称賛されたり罰されたりすることはない。神経活動はあくまでも選択肢を提示するものであり、責任の主体ではありえないのである。

発話における脳と人の役割を理解するための比喩として、パソコンやスマートフォンによる（予測）変換が助けになる。ある文字列を入力すると、それを含む高頻度の表現が表示され、使用者は多くの場合その内の一つを選択することになる。この際に、候補を提示するのは機械の役割であるが、それを選択する責任を負うのはあくまでも人である¹¹。文字入力、機械を利用して人が行う行為であるのと同様に、言葉の選択は脳（神経活動）を利用して人が行う行為だと考えられる。

5. 言葉にすることによる理解

ここまでは、言語によってカテゴリー化される対象が予め存在していることを前提に議論を進めてきた。言いたいことが何もないにもかかわらず、言語化だけが起こるということの不合理さを考えれば、この想定には一定の妥当性がある¹²。その一方で私（たち）は、言いたいことが何なのか上手く把握できない場合に、様々な仕方での言語化を通じて、言いたいことに辿り着こうとすることがある。ある言葉が思いついた瞬間に、何が言いたかったか分かるという経験の実在性は疑い得ないだろう。このことについて、古田（2018:192）は、「ある言葉が生まれることによって、それが生まれる以前のものの見方や感じ方、考え方などが明らかになる、というある種パラドキシカルな構造」と指摘している。

この構造は、言語記号の（慣習化した）意味が多層的であることを考慮すれば自然なものとして位置づけられる。すでに述べたように、言葉の意味には、使用事象のあらゆる側面が含まれる。そのため、言いたいことの全体像が（十分に具体的に）カテゴリー化されていなくとも、おぼろげに捉えられた部分を言語記号の意味によってカテゴリー化することによって、当該の部分により細密になるだけでなく、他の側面も補われることになる。このようなカテゴリー化を繰り返すことで、対象（言いたかったこと）と一致度のより高いカテゴリー化を行うことのできる言語記号に迫ることができるようになり、一致度が十分に高くなった場合に〈しっくりくる〉感覚が生じ、言いたかったことが何だったのか分かるのである。

6. おわりに

私（たち）は、〈しっくりくる〉・〈しっくりこない〉という直観を手がかりに対象をカテゴリー化し、言葉を選択していく。重要なのは、この直観自体を意識的に生じさせることはできない（あるいは、極めて困難である）ということである。直観の源泉（の一部）はやはり脳にあ

¹¹ この比喩は、選択において意識的な反省が働かないこともしばしばあるという点も捉えることができる。

¹² この点について、もっぱら会話の間を埋めるためだけに何事か発話することは珍しくないという反論がなされるかもしれない。しかし、この場合であっても、記述的な側面において言いたいことが（ほとんど）ないだけであり、談話的な側面において言いたいことは（まさに、当の発話において「間を埋める」という意図として）存在するだろう。

と言わざるを得ない。しかし一方で、人は自らの行為を通じて、脳のはたらきを緩やかな仕方であれコントロールすることができることもまた事実である。

ここまでくれば、冒頭の問題、すなわち言語の主体は脳か人かという問に対する答えはもはや明らかだろう。脳か人かという二者択一は誤った問題設定であり、現実には脳も人もなのである。

参考文献

- Devitt, Michael (2003) Linguistics is not psychology. Alex Barber (ed.) *Epistemology of language*, 107-139. Oxford: Oxford University Press.
- 本多啓 (2016)「Subjectification を三項関係から見直す」中村芳久・上原聡 (編)『ラネカーの (間) 主観性とその展開』: 91-120. 東京: 開拓社.
- 古田徹也 (2018)『言葉の魂の哲学』東京: 講談社.
- Itkonen, Esa (2016) An assessment of (mentalist) cognitive semantics. *Public Journal of Semiotics*, 7(1), 1-42.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1997) The contextual basis of cognitive semantics. Jan Nuyts et al. (eds.), *Language and conceptualization*, 229-252. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow et al. (eds.) *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2010) How not to disagree: The emergence of structure from usage. Kasper Boye et al. (eds.), *Language usage and language structure*, 107-143, Berlin and New York: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23-53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Nefdt, Ryan M. (2019) The philosophy of linguistics: Scientific underpinnings and methodological disputes. *Philosophy Compass*, 14 (12): 1-14.
- 西村義樹 (2018)「認知言語学の文法研究」西村義樹 (編)『認知文法論 I』: 3-23. 東京: 大修館書店.
- 野矢茂樹 (2011)『語り得ぬものを語る』東京: 講談社.
- Popper, Karl (1972) *Objective knowledge*. Oxford: Oxford University Press.
- Santana, Carlos (2016) What is language. *Ergo*, 3 (19): 501-523.
- 山泉実 (2005)「シネクドキの認知意味論へ向けて—類によるシネクドキ再考」山梨正明ほか (編)『認知言語学論考 No.4』: 271-312. 東京: ひつじ書房.

まとめに代えて —英語学から見た「認知文法の基礎研究」—

平沢慎也 (s-hirasawa@keio.jp)

1. 本発表（第 5 発表）の立ち位置

- ・ 本ワークショップのメインは第 1～4 発表。
- ・ 本発表はメインの 4 発表の射程の広さを示すべく補足を行う。
 - ▷ 第 1～3 発表に関しては英語の実例の観点から検討
 - ▶ 第 4 発表に関しては①自由意志、②外国語のアウトプットの観点から問題提起

2. 第 1 発表「Don't be that guy から考える世界の見え方」

2.1. [be V-ing ...s] への注目

- ・ 基準時において行為をしている対象は 1 つなのに、[be V-ing ...s] が用いられる場合がある。
- ・ ...s からすると、インスタンスの次元の話をしているように見えるが、それだと矛盾する。
- ・ このような表現が用いられるのはどのような場合か？

2.2. 行為連続の想定がある場合

- (1) [状況説明] WOSA はインフォーマントが翻訳している特殊な文書。訳すときには 1 日に何個も訳す。

“What are you doing?” “I am **translating** WOSAs.” (インフォーマント提供)

「何してるの？」「WOSA の翻訳中」

- (2) [状況説明] Max が選挙のために用意した動画の中で言うセリフ。動画内では弟にキスをする。
Max Fuller is running for class president. I'm on the campaign trail and **kissing babies**.

(Fuller House, Season 4, Episode 7)

マックス・フラーは学級委員長選挙に立候補します。選挙遊説中で、小さな子どもにキスをして回っています。

2.3. それ以外の場合（とは？）

- (3) [状況説明] 話し手は、自分の母親が過去の不倫を告白する遺書の中でジョークを織り交ぜていることに呆れて次のように言う。

I can't believe she's **making jokes**. (映画 *The Bridges of Madison County*)

ここでジョーク言うかよ、普通。

- (4) [状況説明] Quinn は恋人 Barney が隠し事をしていることに怒っていたが、その Quinn も実は隠し事をしていることが発覚して、Barney が次のように言う。

Well, well, well. Look who's **keeping secrets** now. (How I Met Your Mother, Season 7, Episode 24)

あれあれ？ 今度はクインが隠し事かあ。

- (5) Jennifer: He's dead.
Elliot: Now, Jennifer, you're **jumping to conclusions**.¹ (Columbo, Episode 9)
ジェニファー： きっと彼は死んでしまったのね。
エリオット： 待て、ジェニファー、そうすぐに決めつけるな。
- (6) Eliot and I had been **playing videogames** for about an hour that night when there was suddenly a knock at the door. (Tiffany Jenkins, *High Achiever*)
その日の夜、エリオットと私が1時間くらいTVゲームをしていると、急にドアのノックが聞こえた。
- (7) a. [状況説明] 話し手はある実験のために、聞き手の Jason を *Madden Football* というゲームがセットされた部屋に閉じ込める。
In front of you is a video game system loaded with *Madden Football*.
目の前にあるのはTVゲームができるシステムで、マッデン・フットボールが入ってます。
b. [状況説明] aの部屋で Jason が何をしているのかを説明している。
Jason is **playing video games**. (The Good Place, Season 2, Episode 11)
ジェイソンはTVゲーム中。
- (8) [状況説明] Max は柄にもなく不良のような格好や言葉遣いをし始めて周囲を心配させている。
以下は、フードファイトに挑戦中の Ramona を Max が Now, finish him, Ro-Ro! (とどめをさしちまえ, Ro-Ro!) と応援しているのを聞いた Steve が驚いて言うセリフ。
Ro-Ro? Now he's **using unclever nicknames**? (Fuller House, Season 5, Episode 14)
Ro-Ro? 今度はウィットゼロのあだ名付け始めたのかよ。
- (9) [状況説明] Eustace が1匹の鳥に話しかけているのを Tavros らが目撃する。
Tavros: Why are you talking to that bird?
Eustace: I just naturally assumed you can ...
Tavros: Ha ha ha he's **talking to birds**!
(映画 *The Chronicles of Narnia: The Voyage of the Dawn Treader*)
タヴロス： なんで鳥なんかに喋ってんだ？
ユースタス： だってあんたたち動物たちと会話してるじゃないか。だから鳥だって…
タヴロス： ハハハ、あいつ、鳥に喋りかけてやんの！
- (10) [状況説明] 建築家 Ted に好かれようとしている女の子(と見せかけて実は Barney と Marshall) が Ted に送ったメール：
just sitting around **reading architecture magazines** in my old cheerleader uniform
(How I Met Your Mother, Season 4, Episode 21)
いまりラックスタイムで、昔チアやってた頃のユニフォーム着て建築雑誌読んでるの

¹ 「たとえ「結論」が一つであっても、conclusion は複数形をとるのがふつう」(マケーレブ&安田 1983: 233)

- (11) a. Mom, can you help me with my homework?—No, not while I'm **reading books**.

(インフォーマント提供)

お母さん、宿題手伝ってくれない？—ダメ。本読んでる間はダメ。

- b. Mom, what are you doing?—^{??}I'm **reading books**.

(インフォーマント提供)

「何してるの？—本読んでる」を意図。

- (12) a. Mom, can you help me with my homework? —No, not while I'm **making phone calls**.

(インフォーマント提供)

お母さん、宿題手伝ってくれない？—ダメ。電話してる間はダメ。

- b. Mom, what are you doing?—^{??}I'm **making phone calls**.

(インフォーマント提供)

「お母さん、何してるの？—電話してる」を意図。

2.4. 先行研究

- (13) At least three types of nonreferentiality involve the use of full nouns rather than pronouns. In one such type a nominal idea is used to specify more fully the nature of an event, as in

(44) ..he was telling jokes.²

Here a unified idea is verbalized with a conventionalized collocation of verb and noun. Other languages might express such an idea with a compound or with noun incorporation (cf. English *joke-telling*; Mithun 1984, p. 849). (Chafe 1994: 104)

代名詞ではなく完全名詞句が非指示的に用いられるケースには少なくとも 3 通りある。まず 1 つ目は、以下の例にあるように、出来事の性質をより具体的に表現するために名詞的概念を利用するというタイプである。

(44) ..he was telling jokes. (彼は冗談を言ってたんだよ)

この例では、動詞と名詞の慣習的なコロケーションを利用することによって、不可分のひとまとまりの概念が言語化されている。英語以外の言語であれば、このような概念を表現するのに複合語または名詞抱合を利用するところかもしれない (cf. 英語の *joke-telling*; Mithun 1984, p. 849)。

→「動詞と名詞の慣習的なコロケーション」は(7)までは当てはまるが、(8)からは当てはまらない。

→当該の行為を「**タイプ化**」するための言い方だと考えてはどうか？

2.5. タイプ化と発話意図

タイプ化を促す（引き起こす）**発話意図**というものがあるそう。

- ・当該の行為を文化的に定着した行為として表現したい
- ・今この瞬間に当該の行為をしていることではなく、その行為自体に対する評価を下したい

² ..は「短いポーズ」、~は「作例だが実例であつてもおかしくない」の意。

- ・ 常日頃から当該の行為をしているように見せたい
- ・ 当該の行為は相手もしている行為だと伝えることで共感を引き出したい
- ・ 当該の行為に関連するルール作りをしたい などなど

★第1 発表と一見全然違う現象に見えて、起こっていることはかなり似ているのでは？

3. 第2 発表「「コト」としての記号：認知文法における形態素」

3.1. 静的な形態素観だと分析に困る例

- (14) Chris: You could be a real writer someday, Gordie.
 Gordie: Fuck writing! I don't wanna be a writer! It's stupid! It's a stupid wasted time!
 Chris: That's your dad talking.
 Gordie: Bullshit.
 Chris: **Bulltrue.** I know how your dad feels about you, he doesn't give a shit about you.

(映画 *Stand by Me*)

クリス： お前、いつか本物の作家にだってなれちゃうんじゃないか。
 ゴーディー： 作家なんて興味ねえよ！ 作家になんかなりたかない。くだらない！ 時間の無駄だ！
 クリス： 親父さんがそう言ってるだけだ。
 ゴーディー： んなことねえよ。
 クリス： んなことあるさ。親父さんがお前のことどう思ってるかは知ってる。お前のことなんてどうだっていいんだろ。

- (15) [状況説明] Jess が男性とぐるになって Nicky を騙そうとしていることに Nicky ははじめから気がついていて。そのことに Jess が気付いて：

Jess: When did you make us?
 Nicky: Uh, when you stole the wallet from the bum downstairs.
 Jess: Bullshit.
 Nicky: No, **real shit.**
 ジェス： いつからバレてた？
 ニッキー： 一階で酔っぱらいから財布盗むの見たときから。
 ジェス： 嘘ばっかり。
 ニッキー： 本当ですう。

(映画 *Focus*)

(14)の bulltrue：

bullshit の-shit と、shit 「たわごと、でたらめ」の間の**リンク発見** (→そこを true に変更)

※ここでは bull- と bull 「ナンセンス、うそ、ほら」のリンクは発見されていない

(15)の real shit :

bullshit の bull- と bull 「ナンセンス、うそ、ほら」の **リンク発見** (→そこを real に変更)

※ここでは -shit と, shit 「たわごと、でたらめ」の間のリンクは発見されていない

★ bull- や -shit という形態素のそれぞれがある一定の意味と結びついているという静的な形態素観では、(14)・(15)で問題なくコミュニケーションが成立していることの説明がつかない。

4. 第3発表「使用基盤モデルの哲学的検討」

以下、平沢 (2021, 近刊) より。

4.1. えんえんと喋る [V on about NP] 構文

- (16) ‘Look, Maddie [...] I know Agatha, and she would not murder anyone. She’s a lady.’ ‘Oh, come on, Bill, the way you **go on about** the old trout, one would think you were her toy-boy. [...]’

(M.C. Beaton, *Agatha Raisin and the Murderous Marriage*)

「あのなあ、マディー [...] アガサのことはよく知っているけど、殺人なんてする女じゃない。れっきとしたレディーだよ」「まったくいい加減にしてよ、ビル。さっきからうだうだうだうだ。お前はあのババアに可愛がられてる彼氏か、って感じよ。[...]」

- (17) [状況説明] 高校生が自分の家系に関する調査の結果を発表する。

Unfortunately, my great-great-grandfather, the genius that he was, wound up going blind and crazy in psycho ward, drawing these strange symbols and **babbling on about** some giant ice man that he thought he’d discovered.

(映画 *Transformers*)

残念ながら、僕の曾曾祖父さんは、すごい人だったのですが、目が見えなくなって、さらに頭もおかしくなって精神病棟に入りました。こういう変な記号を書いて、「私は巨大な氷男を発見したのだ」とかなんとか、訳の分からないことをえんえんと言っていたらしいです。

- (18) [状況説明] Alva は話し手の元夫。Storm は2人の息子。

Like I said, Alva thinks it’s time Storm lived with him full-time. Not just weekends and holidays and stuff. You know what Alva’s like, **banging on about** father/son time and a strong male role model and all that bollocks.

(Juliet Ashton, *The Sunday Lunch Club*)

前も言ったけど、アルバが「そろそろストームは自分とずっと一緒にいた方がいいんじゃないか」って思ってるみたいなの。週末とか休日とかだけじゃなくてね。ほら、アルバってそういう感じの人じゃない？ 父と子の男同士の時間がどうか、強くたくましい男の見本を見せねばとか、バカみたいなことをえんえん力説してさ。

- (19) And then I discovered this area, North Beach. Best beach ever. Oh, I’ve been **blabbering on about** my summer. How are you guys doing?

(*How I Met Your Mother*, Season 2, Episode 2)

そしたらすごいところ見つけちゃって。ノースビーチっていうの。こんな素敵なビーチ見たこと

ないって感じで。ごめん、なんか自分の夏休みのことばっかべらべら喋っちゃった。2人はどんな感じ？

- (20) He said he was a Buddhist, and he **blathered on** a lot **about** peace and love and tolerance, which would have been fine if he wasn't such a dink. (Susin Nielsen, *No Fixed Address*)

彼は自称仏教徒で、平和がどうか愛がどうか、寛容の精神がうんたらかんたらと延々言っていた。これ自体は問題ないことのはずだけれど、言っているのが彼ほどのカスとなると話は別だ。

- (21) [...] I suddenly saw in Ethan what Rachel was always **carrying on about**. He was pretty cute. (Emily Giffin, *Something Blue*)

[...] 急に、レイチェルがどうしていつもイーサン、イーサン言ってるのか分かってしまった。イーサンは結構かっこいいのだ。

- (22) And reminded her at once that their relationship was essentially bodily, physical and here-and-now, it wasn't for **droning on about** books. (Graham Swift, *Mothering Sunday*)

彼はすぐに彼女に釘を差して言った。「僕たちのこの関係は実質的には体の関係、物理的なイマ・ココの関係だ。本がどうのこうのとつまらん話をするための関係ではない」

- (23) The reader needs to know whether a writer is **rabbiting on about** a topic in order to explain it, convey interesting new facts about it, advance an argument about it, or use it as an example of an important generalization. (Steven Pinker, *The Sense of Style*)

読み手は、書き手があるトピックについて長々と文章を書き連ねているのは、その理由を説明するためなのか、それについての面白い新事実を伝えるためなのか、それについての主張を提示するためなのか、それともそれを例に取って重要な一般法則の話をしたいのか、ということを知る必要があるのである。

- (24) I inquired about his girlfriend, letting him **ramble on about** their upcoming trip to Jamaica. (Emily Giffin, *Something Borrowed*)

アレックに恋人とはどうなのと尋ねると、今度ジャマイカに行くからどうのこうのという話を彼は一人でえんえん続けた。

- (25) I heard my voice **rattling on about** my mother, **about** Uncle Victor, **about** Central Park and Kitty Wu. (Paul Auster, *Moon Palace*)

気付けば私の口は母親のこと、ビクター伯父さんのこと、セントラルパークとキティー・ウーのことをべらべらべらと喋っていた。

表 1 COCA で 10 件以上の用例が見つかる *V on about* NP

順位	<i>V on about</i>	V の第 1 音節			V の第 2 音節			頻度
		子音	母音	子音	子音	母音	子音	
1	<i>go on about</i>	g	ou					1774
2	<i>ramble on about</i>	r	æ	m	b	ɪ		165
3	<i>drone on about</i>	dr	ou	n				115
4	<i>carry on about</i>	k	æ	(r)	r	i		108
5	<i>prattle on about</i>	pr	æ	(t)	t	ɪ		96
6	<i>babble on about</i>	b	æ	(b)	b	ɪ		78
7	<i>blather on about</i>	bl	æ	(ð)	ð	ə	r	70
8	<i>bang on about</i>	b	æ	ŋ				58
9	<i>rattle on about</i>	r	æ	(t)	t	ɪ		55
10	<i>yammer on about</i>	j	æ	(m)	m	ə	r	44
11	<i>chatter on about</i>	tʃ	æ	(t)	t	ə	r	33
12	<i>wax on about</i>	w	æ	ks				26
13	<i>harp on about</i>	h	ɑ:	rp				25
14	<i>natter on about</i>	n	æ	(t)	t	ə	r	20
15	<i>run on about</i>	r	ʌ	n				19
16	<i>rave on about</i>	r	eɪ	v				18
17	<i>rant on about</i>	r	æ	nt				15
18	<i>get on about</i>	g	ɛ	t				13
18	<i>keep on about</i>	k	i:	p				13
20	<i>rage on about</i>	r	eɪ	dʒ				12
21	<i>bleat on about</i>	bl	i:	t				11
22	<i>blab on about</i>	bl	æ	b				10
22	<i>talk on about</i>	t	ɔ:	k				10
合計								2788

表 2 母音ごとの頻度

母音	ou	æ	ɑ:	eɪ	i:	ʌ	ɛ	ɔ:	合計
頻度	1889	778	25	30	24	19	13	10	2788

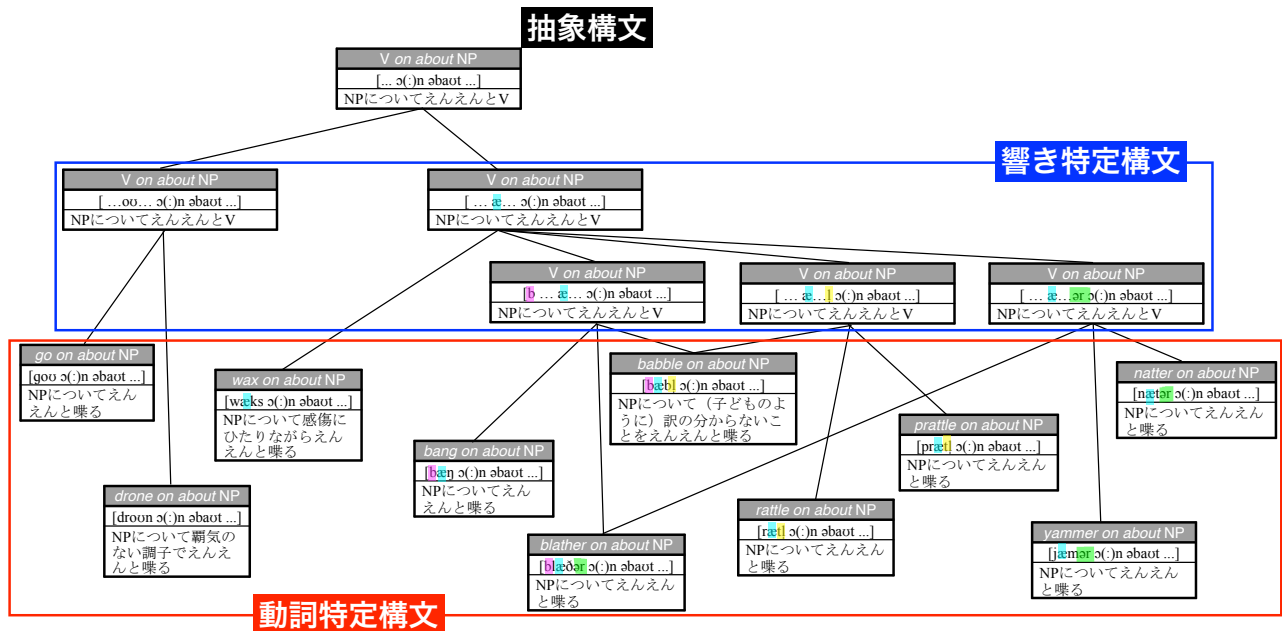


図 1 V on about NP の観察事実の (部分的) まとめ

4.2. 大量の具体事例に触れているからこそ生じる混乱

少なくとも現代のアメリカ英語、イギリス英語では…

<i>yatter on about NP</i>	✓
<i>yammer on about NP</i>	✓
<i>natter on about NP</i>	✓
<i>nammer on about NP</i>	φ
<i>blabber on about NP</i>	✓
<i>yabber on about NP</i>	✓
<i>blather on about NP</i>	✓
<i>yather on about NP</i>	φ
<i>prattle on about NP</i>	✓
<i>natter on about NP</i>	✓
<i>pratter on about NP</i>	φ

のはずなのだけれど…

- (26) Imagine if all the news orgs **prattering on about** the Grammys instead sent reporters out to find new, good local music. (https://twitter.com/willcarless/status/564806433959837696)
- 想像してみてよ。報道機関がみんなしてグラミー賞うんぬん言うんじゃなくて、記者を各地に飛ばして新しい良いローカル・ミュージックを発掘しようとしてたらどうなってるだろうって。
- (27) My daughter (11) is **yathering on about** hand sanitisers—as I'd say they're all driving each other crazy in school. Should I send her in with a naggin?

(<https://twitter.com/Orlaodo/status/1233428845593874432>)

娘（11 歳）までハンドジェルちょうだいてわーわー言ってる。学校にいと相乗効果でどん
どん神経質になっちゃうみたい。酒の瓶でも持たせようかしら？

→ほかに *nammer on about NP* や *rammer on about NP*、*bather on about NP* といった例も。

- ★ こうした混乱はおびただしい種類の実例に触れているからこそ生じる，いわば「母語話者的」な混乱であって，たとえば日本の平均的な英語学習者からすればむしろ無縁であるような混乱だろう。
- ★ 使用基盤モデルはこうした「**母語話者であるがゆえの混乱・混同**」となんら矛盾しないどころか，それを積極的に予測することすらできるモデルである。

5. 第4発表「脳か人か：言うことはどのように決まるのか」

5.1. 理解確認

図2のフローチャートおよび青字のまとめは発表の理解として正しいか

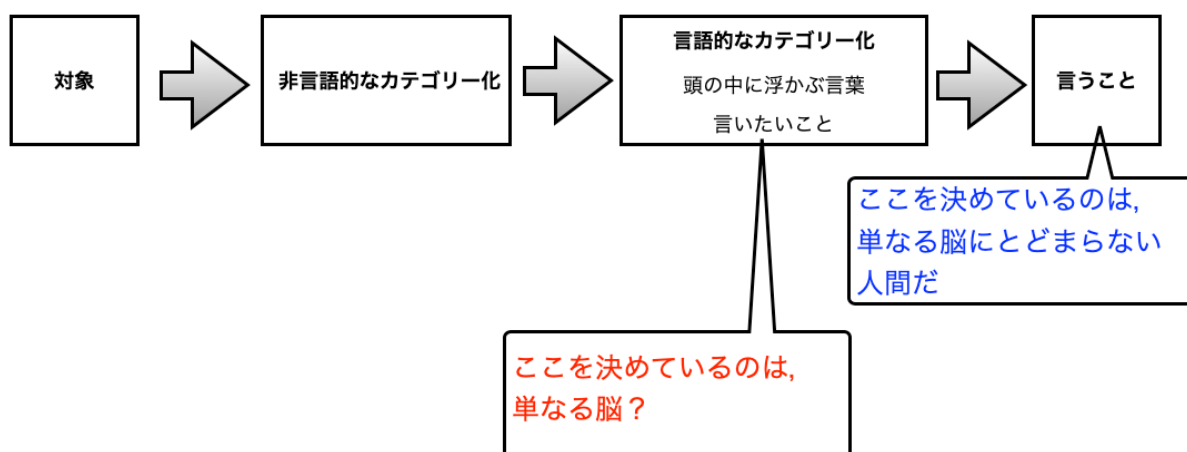


図2 第4発表についての平沢の解釈・質問

5.2. 質問

図2の赤字にどう答えるか

-----もしイエスだとしたら，つまり浮かぶ言葉は脳任せ，人間は脳のなすがままなのだとしたら，先行文脈に全く関係のない語句が突然思い浮かぶことが極めて稀なのは（思い浮かぶ言葉を基本的にはコントロールできているかのようなのであるのは）どうしてか

★「言語に自由意志はあるのか」問題

★外国語のアウトプット問題

6. 参考文献

Chafe, Wallace (1994) *Discourse, consciousness, and time: The flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*. Chicago & London: University of Chicago Press.

平沢慎也 (2021) 「実例とのたわむれかた—英語の前置詞を中心に—」(2021 年 6 月 19 日オンライン講演会ハンドアウト). 東京: くろしお出版.

平沢慎也 (近刊) 「えんえんと喋る V on about NP 構文—活躍する「響き」の記憶—」

マケーレブ, ジャン・安田一郎 (1983) 『アメリカ口語辞典』東京: 朝日出版社.